

戦争体験記録

凡例

- 一. 『新編 大村市史』近代編の資料として、大村市出身者又は戦時下の市内在住者の戦争体験を幅広く聞き取り、収録した。
- 二. 戦争体験は、日中戦争から太平洋戦争までの期間と終戦時を対象とした。
- 三. 調査は平成二十五年五～八月に市史編さん室が、終戦時六～二八歳であった男女二三名から、戦時下の生活、大村の空襲、第二十一海軍航空廠を始めとした学徒動員、出征・見送り、原子爆弾投下時の様子、被爆者への救援活動、終戦のラジオ放送、米軍の進駐、戦後の混乱、その他戦争に関連する体験・記憶の聞き取りを行った。
- 四. 戦争体験記録を歴史資料として後世に伝えるため、戦争体験者の承諾を得た上で、氏名、生年月日、聞き取り時の年齢、終戦時の年齢、性別、また、話者が複数の場合は関係を記載した。
- 五. 記録の構成は、冒頭に経歴を記載し、各項目の体験を収録している。経歴は、当時の家族構成などの環境が体験にも影響するため、簡単に触れた。
- 六. 体験記録の中には、一部史実と異なる記述も含まれるが、個人の記憶・証言を尊重し、そのまま収録した。また記録中に当時と現在で使用する語句、名称等が混同している場合、適宜本文に添えた。
- 七. 体験記録の中には、現在の認識に照らすと一部ふさわしくない表現を含むが、当時の時代認識を伝えるため、話者が使った言葉をそのまま歴史的語彙として収録した。必要に応じて新村 出編『広辞苑』第六版(岩波書店 二〇〇八)等を参考に編さん室で註を付けた。
- 八. 話者が複数の体験記録において、二人以上から発せられた情報で構成されるものは、行頭に覆と記して掲載した。二人以上の聞き取りは同時に行った。
- 九. 体験を語る上で、戦争体験者から個人の手記等を提示された場合は、参考文献として体験記録の末尾に掲載した。

■ 記録 1

氏福 治隆 生年月日 昭和七年二月一日 八一歳(終戦時一三歳)

田中 誠 生年月日 昭和四年三月二十五日 八四歳(終戦時一六歳)

性別 男性 関係 知人

一・経歴について

(氏福さん)父は、当時県庁職員。毎日列車で長崎に通勤していた。田畑を持っていたが、お百姓さんに貸しており、農業はしていなかった。米はお百姓さんから納めてもらっていた。

(田中さん)兼業農家。父は萱瀬村役場の収入役を任期いっぱい務めて、戦争が始まる少し前に産業組合に転職。産業組合の組合長、萱瀬地区の警防団長を務めた。当時、収入役は各村落の有識者が推薦されてなることが多かった。農業もかたわらでやっていた。

二・配給・切符制、衣服について

当時米は配給制で、一カ月分の割当てが配給されても、実際には一週間分くらいしかなかった。

(田中さん)農家は保有米が認められており、米の切符はもらわなかった。

(氏福さん)戦時中は、もう栄養分のないような種芋すら買いに來る人がいた。戦後は闇米といって、物々交換しながら手に入れる人が多かった。

襖肉屋や酒屋に行くにも切符がないと行けず、牛・豚は戦争が始まってからはほとんど見かけず、革製品もなかった。革は全部軍へ回されていたと思う。鶏はいたが、年に何回かしか食用にすることがない時代だったので、貴重なタンパク源であった。

当時は靴を履いている人は少なく、草履が普通で誰でも作っていた。遊ぶ時は裸足でも平気だった。また戦時中は、「つのんぼ」と呼んだ藁草履を皆履いていた。物資がなく、花緒部分も藁で編み、ましなものは上から布を織り

込んでいたが、よく切れていた。第二十一海軍航空廠に動員された時は下駄で通っていた。物資不足になる以前にはゴム底のズックを履いていた。

(氏福さん) 切符は、市から町内会、町内会長から各隣保班に配られていた。衣服・食糧・生活用品は全て切符で、学用品は学校で現物支給されていた。一クラス九〇名いるにもかかわらず、靴は七、八足しか割当てがなく、誰がもらえるかをくじ引きで決めていた。

(氏福さん) 旧制中学に入ってから支給された桑の木皮の繊維で作られた制服は、あまり暖かくなかった。背囊(軍人・学生などが物品を入れて背に負う方形のかばん)も木で作った箱に布を貼り付けただけの物だった。戦後昭和四十五年くらいまでは、修学旅行の時、旅館に泊まる際は米を持ち込んで炊いてもらっていた。町では到底食べ物が足りないもので、農家に物々交換に来る人もいたと思う。

三. 当時の学校について

〔複〕当時、義務教育六年を卒業したら、働くのが普通だった。女の子はよく子守として働いていた。

四. 防空演習・防空訓練について

〔複〕各町内の消防団が中心となった防空演習があった。恐らく市全域で行われていた。消防団員の指導的立場にいたのは男性(年配で兵隊に行かなかった人など)で、女性も団員になった。防空演習は年齢関係なく参加し、風呂桶くらいの大きさの防火用水槽(軒先に備えている家もあった)があり、そこから消火場所までバケツを手渡しして消火する練習をしていた。学校での防空訓練では、軍隊式に学級を小班に分け、班長がいた。先生の指示で避難訓練が実施されていた。

五. 灯火管制・お風呂について

〔複〕夜暗くなったら裸電球に黒布をかけて、外に光がもれないようにしていた。限られた範囲しか照らされない中でも勉強や生活はできた。煙は昼夜にかかわらず、出してはいけなかった。

町の人はよく銭湯を利用していたが、終戦近くになると毎日は営業しなくなっていた。湯を沸かすには、銭湯は石炭やコークスを、農家は薪を使っていた。

ロウソク送電と呼ばれる状態があった。電力が統制されていたので、電灯はついてもロウソク程度の明るさで弱くしか点かなかった。

六. 食生活について

〔榎〕当時、米は少ししかなかったので麦を混ぜ、終戦が近づく頃には麦の比率が高くなった。脱脂大豆も混ぜて食べた。

(氏福さん)軍では米の代用としてコーリヤン(モロコシ)が出されていたのを見たことがある。赤飯かと思った。

動員された航空廠ではお昼はお弁当が出され、米は麦や脱脂大豆を混ぜたもので、おかずはダイコン、カボチャの煮しめ、時々鯨の赤身を煮たものなどが入っていた。塩味の大豆がおかずの時もあった。お弁当の量は多かった。米ぬかと芋で作られた徴用だご(だんご)は、航空廠の購買部(国道三四号沿い、現在の県営住宅桜馬場団地近く)で売られていた。甘くおいしかった。

七. 映画館について

〔榎〕当時、県営住宅桜馬場団地近くの航空会館、竹松駅近く、それに古町の三カ所に映画館があった。映画は一区切りが一時間半〜二時間。陸軍、海軍の快進撃などのニュース映画とそれ以外の映画もやっていた。終戦近くまで毎日放映していた。工員だけに通用する金券があった。

八. 列車の切符について

〔榎〕列車に乗るためには、二時間に一本の列車の何時間か前から並んで切符を買わなければならなかった。

(氏福さん)切符は限られていたので、二時間くらい並んでも買えないことがあった。時間がかかるので、家族で交代で並んだりしていた。自分が並ぶこともあった。

九 駅・郵便局について

〔複〕駅には年配男性の駅長さんがいたが、他に切符切りなどの仕事は女性がしていた。郵便局でも女性が働いていた。戦争が始まるまで女性は圧倒的に専業主婦が多かったが、戦争になってから男性が戦争に行った人手不足を補うために働いたと思う。

一〇 祈願祭・出征の見送りについて

〔複〕出征が決まったら各居住地の村社に「武運長久」を祈願し、神主さんが祝詞いのちをあげた。田中さんは氷川神社、氏福さんは富松神社に行った。町内会や身内で参加し、大小合わせて何回でもしていた。学校職員や役場職員も参加していた。千人針は身内や町内、婦人会で回して作った。寅年の人は年齢の分だけ針を通せたので、田中さんの母は、よく頼まれていた。出征の見送りに日丸の旗を持って参加した。町内会長の激励、本人の挨拶などがあり、出征者はたすきをかけていた。出征の見送りの町内会が中心になってやっていた。

一一 終戦について

〔複〕ラジオは学校、軍にあったが、一般家庭にはほとんどなかった。一〇軒に一軒もなかった。

（田中さん）十日の夜に原子爆弾が投下された長崎から帰ってきた。十五日までは体がきつかったので家の布団で寝ていたが、布団に入りながらラジオを聴くのが唯一の楽しみだった。八月十五日朝から「重大放送があるので聞くように」とラジオで聞いたので、正午に自宅で聞いた。始めに国歌が流れ、アナウンサーが天皇自らの「玉音放送」があるように言った。天皇自らの放送があることはこれまでなかったので、何事かと驚い



写真1 駅での見送り

(個人蔵)

て聞いたが、本土決戦に向けて頑張れというラジオ放送だと予想した。ラジオは雑音が多く、よく聞こえなかったが「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」という言葉は聞こえ、「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍」んで本土決戦で頑張れということだと感じた。夕方になると自宅に下宿していた徴用工員の三人が帰ってきて「工場長から日本は戦争に負けたと聞いた。だから徴用工員は仕事を一通り片付けたら（実家に）帰る準備をしておくように言われた」と言っているのを聞き、それで放送内容を理解した。軍の幹部たちは知っていたような気がする。戦局は厳しいと知っていたがまさか負けるとは思っておらず、元寇の時、神風が吹いたというような何かが起こり、なんとかなるのではと思っていた。当時は「敗戦」ではなく「終戦」と言っていた。灯火管制が解かれて、夜、部屋を明るくできたのが何より嬉しかった。

（氏福さん）戦時中は誰もが日本が負けるとは思っていなかったはずだ。普通の一般的な人は皆そうだった。終戦になり、防空壕に入らなくてよくなったのが嬉しかった。戦後の食糧不足で食べるものがなく、いつもお腹が空きつらかった。

■記録2

氏福 治隆 前出

一・校内動員について

工場ではなく学校内で、ヤスリがけの作業や鑿たがね（銅製ののみ。以下タガネと表記）とハンマーを用いて、鉄を切断する訓練をした。部品はリヤカーで第二十一海軍航空廠に取りにいった。

二・防空壕について

防空壕は、一、二学年上級の先輩が大村公園に掘ったものと大村高校の崖下のものがあった。自宅にも畑をつぶして作ったものがあり、当時は庭や藪や畑に民家用の防空壕があるのが普通だった。掘るのは、兵役に出なくて

残っていた男手にお願ひし、自分は土運びを手伝ったことがある。壕は一畝くらいひの深さで、中は三畳くらいひの広さがあり、屋根を作る仕上げは大工にお願ひした。屋根の上には土をかぶせた。作るのに一カ月くらいひがかつた。雨が降れば、中に水がたまつた。忠霊塔周辺にはたくさん防空壕があり、家族は、特に原爆投下後はそこまです逃げていた。

三. 勤勞奉仕について

市内の農家へは日歸りで、千綿（東彼杵町）へは一週間ほど泊り込みで農作業に行った。町では白御飯は食べられなかつたが、農家では食べられるので（奉仕に）行くのが楽しみだつた。作業は麦刈りや田打ち、芋さしなどの作業をした。田を起こすのは馬や人力でやつた。

四. 空襲警報について

軍の施設外での空襲警報は、消防団と警察が鳴らしていた。現在の市街地には、消防団の詰め所や警察などにサイレンがあつた。よく鳴っていた。防空壕に退避する際は、訓練が行き届いていた。静かに行動した。それが訓練で身につけていた。航空廠動員中に空襲があり、近くの防空壕は満員で入れなかつたので、「どうなつても仕方ない」と外で寝転がっていたところ、「こつちへ来い」と呼ばれたのでそこへ逃げた。空襲がおさまつて戻つてくると自分たちのいたところが銃撃されており、木につながれていた馬が腹に銃撃を受けて穴が開いていた。



写真2 大村公園内の樹木に隠れた崖面には現在も防空壕が残っている

五、道路

今の大村部隊辺りは火山灰土で水はけが悪く、雨が降ると深くぬかるんだ。乾いていけばほこりっぽかった。軍人の乗る馬が落とした糞を道で見つけると、(肥料になるので)農家の人は拾って田畑に入れていた。

六、交通機関について

当時、民間人が使える自動車はほとんどなく、主に徒歩で、自転車も時々使った。戦後、通学距離で四キロメートルぐらいになれば、木炭バスを利用した。

海軍の佐官以上には黒塗りの車があった。当時、松原には海軍司令がおり、その親戚で同居している友達がいた。その家にはキャラメルやバターや一般の家にはないものがたくさんあり、遊びに行つてはもらっていた。軍基地に戻る黒塗りの車で送ってもらったこともある。

七、軍事教練、国民学校、中学校について

軍事教練は、小学校では普通の先生、中学校では配属将校(退役軍人)二名が来ていた。行進や匍匐くはく前進、竹槍の訓練をした。旧制中学校では、それとは別に、柔道と剣道が正課だった。

小学校では記念撮影をしたが皆お金がなく、写真代を稼ぐため、勤労奉仕を兼ねて先生が口利きをして、生徒が萱瀬の炭を運んだこともあった。炭は山から背負って運んだ。

戦時中も家庭訪問は四月末～五月に行われていた。

昭和十八年頃、航空廠の関係者が増えたため、西大村小学校の生徒が一気に増えて一クラス九〇名ほどになり、三城小学校(国民学校)を(新設して)分けた。

竹松小学校は、機銃掃射で壁や下のコンクリートは穴だらけで、爆弾のかけらが壁に突き刺さっていた。トイレの壁も穴が開いており、使用中かどうかはすぐ分かった。兵舎と間違われて機銃掃射を受けたのではないか。

八．奉安殿について

奉安殿は、昭和十六年に県内に建てられた。校庭や少し段のついた高い所であった。登下校時に生徒は一礼するよう、担任の先生から指導があった。皆が必ずしていたかどうかは分からない。中には御真影（天皇皇后両陛下の写真）が納められており、入学式、卒業式、始業式の際に管理職の先生が壇上正面の壁の高い所（壁に神棚のようなものが作られていた）に納められた。また講堂（集会や体育に使っていた）も珍しく、大村小学校と松原小学校にしかなかった。講堂はなくても、当時は隣の教室とは仕切りの板戸で（分けられていたので）、外せば二〇〇名くらいは入ることができた。板戸は薄かったので、（仕切っていても）隣の教室の授業や声がよく聞こえていた。

九．生活について

当時、英語を使つてはいけなくなったので、マッチは燐寸、ボートは短艇と言った。規制が直接あった訳ではなく、自然と使わなくなった。使つてはいけない雰囲気と社会だった。それでも旧制中学校では、英語の授業は行われていた。

調味料や食糧も配給制で規制があったので、柿の葉や野草のすべりひゆなどを食べていた。

対米感情はあったが、それより「蒋介石憎し」の感情が強かった。アメリカとの戦争はあくまで中国との戦争が原因となったもので、長期戦になるとは思わなかった。戦争は昭和十六年からひどくなったが、ほとんどの人が「絶対に勝つ」と信じていた。

一〇．憲兵隊について

現在のアーケード内の東本町三九〇番地辺りに憲兵隊があった。有明海でゼロ戦が撃ち落したB 29の乗組員の所持品や遺体一体などが並べられており、見にいった。太ももに撃たれたと分かる穴が開いていた。B 29は工具養成所（今の西大村中学校）で展示された。

一・原子爆弾について

原爆が投下された際、旧制中学校（大村高校）の三階にいた。十時三十分くらいに先生に教室に入るように言われ、先生を待っていたところ、突然、ピカッと光ったので、とっさに机の下に身を隠した。皆、それが習性になっていた。爆音がし、爆風でガラスが割れた。その後避難の指示が来て、外に出るとキノコ雲というより、赤く火の玉のように見え、生徒は学校か大村公園の防空壕へ逃げた。空にはB 29と落下傘が二つ、風で流されていくのを見た。落下傘は恐らく記録か何かをとるものではなかったか。当時は新型爆弾と呼んでいた。

原爆が落ちた日から、警戒警報が鳴ったら、特に夜は用心して防空壕へ退避するようになった。服は枕元にたたんで置いていた。暗闇でも着ることができた。家族は忠霊塔の防空壕へ逃げたが、自分も行っても仕方ないし面倒なので、一人自宅の防空壕に残った（他の家では一家で逃げるが多かったが、実家は留守番を兼ねていた）。通学途中で原爆被災者や亡くなった人を大勢見た。海軍病院への輸送は、女子挺身隊や学徒動員が当たっていた。ほとんどがリヤカーで運んでおり、（氏福さんの）三級上の人までが運んでいたと思う。だから当時の女子挺身隊の人は、原爆手帳を持っている人もいる。被災した人を見ても「やられたのだ」とは思ったが、戦争中のことなので、それ以上の感情はわかかなかった。

二・進駐軍に対して

子どもはチョコレートやキャラメルをもらえたので、よく進駐軍が駐屯している所（現在の陸上自衛隊大村駐屯地）にもらいに行つた。米兵を見に行つた時、もらったことがあった。米兵を見て、（体が）大きいと感じた。大村に進駐した米兵は穏やかだった。戦後まもなくだったので、米兵は日本人に襲われるかもしれない、外出規制があったようにむやみに出入りはしていなかった。

田中 誠 前出

一・長崎の原爆投下について

中学校は昭和十六年に入学し、二十年に卒業した。中学校は勤労奉仕、学徒動員で学生生活のほとんどが終わった。基本的に中学校は五年制だが、四年で繰り上げ卒業になると、ほとんどの人が動員で働いていた第二十一海軍航空廠にそのまま残った。その中から実務科生となる者、予科練や特別幹部候補生となる者もいた。(田中さんは)長崎の工業経営専門学校に進学した。しかし、またすぐに学徒動員となり、昭和二十年七月三十日～八月九日の間三菱兵器製作所で働き、魚雷を作っていた。原爆投下時には茂里町の兵器工場におり、爆心地から一・四^{キロ}ほど離れていなかった。工場の建物がコンクリート造りだった。助かったが、放射能は間接的に浴びたことになる。投下時は、材料を二人で天秤にかけて工場に運び込んでいると、工場内のラジオで敵機が接近していることを知った。するとまもなく稲妻のような強い光線があり、大きく揺れたのでとっさに工場内のモーターの陰に隠れたところ、一部崩れた建物の落下物の下敷きにならずに済んだ。(田中さんがいた)工場のみが攻撃を受けたと思ったが、外に出ると辺り一面の建物が倒壊し、焼けていた。そして「これまでの爆撃とは違う。新型爆弾が落ちた。」と聞いた。空襲と同じように何回かに分けて爆撃があると思いい、工場そばの寺の下の防空壕に入った。中には皮膚がべろべろに剥げた人が多く入っていて、肉が焼けるようなにおいが立ち込めていた。

そのうち、防空壕そばに積まれた廃材に火が燃え移ってきたので、蒸し焼きにならないように動ける者は消火活動に駆り出された。それが終わった後、下宿していた護国神社の禰宜^{ぬぎ}をされていた方のお宅に向かった。山里小学校のそばの大橋の上まで来たが、浦上川に被災者がいっぱいいて「助けてくれ」と叫んでおり、渡ろうとすると足をつかまったりした。今でもその光景は印象に残っている。向こう岸(橋口町)はほとんど焼けており、下宿先もやられたと思ったので、渡りもせずどうにもできずに、夜八時か九時くらいまで橋の欄干に座っていた。そこで親

切にも声をかけてくれた人から「実家はどこか？」と聞かれ、「橋口にいたが、実家は大村なので、もうそこまで歩いて帰るしかない」と答えると、「線路伝いに行けば、救援列車が出てくるから乗れるかもしれない」と教えてくれた。線路伝いに歩き、道ノ尾駅から二番目に出発した救援列車に乗ることができた。動いて元気な者はだめだと一度は乗せてもらえなかったが、べつとりと返り血を浴びていたので重傷者と思われ、運よく乗れた。列車はいっぱいで中には入れず、連結器にしがみついて乗った。速度はとても遅かった。昔の列車は煤煙がひどく、長い長与のトンネル内で煤煙を吸い込んで苦しくなり、手もしびれてきたので、我慢しきれず大草駅で降りた。伊木力の親戚の家まで駅から歩いて向かい、夜中に到着したところお風呂を沸かしてもらった。

翌日は、昼になっても起き上がることができなかったが、親戚から「家族が心配しているだろうから早く家に帰った方がよい」と言われ、手漕船を出してもらい伊木力の船津から大村の波止（鶴亀橋の下）まで送ってもらった。そこから萱瀬の実家まで歩き、十日の晩に帰り着いた。家では親戚が集まり翌日長崎まで（私を）探しにいく相談をしていたらしく、そこに帰ったので一同びっくり仰天し、とても喜んでもらえた。「誠は幽霊ではないか」と母は思わず自身をつねったくらい驚いたとあとから聞いた。

原爆投下から一〇日くらい経ってから、学校から（田中さんが）「行方不明」という電報が来た。翌日（田中さんと）



写真3 聖徳寺から三菱長崎兵器製作所茂里町工場を望む
(長崎原爆資料館所蔵、撮影者：小川虎彦)

父と親戚とで長崎の学校まで出向き、無事を報告した。学校の一階では被災者を収容していて、廊下には行方不明、死亡の生徒の名前が貼り出してあった。下宿していた橋口町のお宅にも行って見たが、跡形もなかった。

記録4

嶋崎 重八 じゅうはち 生年月日 大正八年十月二十五日 九四歳(終戦時二六歳)

性別 男性

一、経歴について

雲仙市の南串山町出身。兄が大連の南満州鉄道株式会社本社経理部に勤務、姉の夫も満鉄に勤務しており、兄弟二人とも満州に住んでいた(現在の中国の遼寧省)。当初は満鉄社員養成学校(五年制)を受験したが落ちて、昭和十年四月、関東局立大連工業学校(五年制)が新しく開校されたので建築科の第一回生として入学した。入学式の時生徒宣誓をした。まだ校歌が制定されてなかったので、作詞家の参考に生徒の学校への思いをまとめた詞を提出した一五名の内、校歌優良賞に選ばれ、賞品に立派な硯箱をもらった。工業学校だったが、自分は中等学校の国語教員を志望していたので、文科(文学)をやると先生に伝えたところ、特別に許可された。建築科卒業の後、東京の日本大学高等師範部国語漢文科に入学し、二年半在学した(通常は三年制だったが、戦時中の特例で半年繰り上げになっていた)。

二〇歳の時に徴兵検査を受け、第一種乙種合格し十月に大刀洗の高射砲隊に現役入隊する予定だったが肋膜(胸膜)を患い六〇日入院した。退院後軍医から郷里に帰って養生して出直してくるように言われた。

その後校内で、大村中学の国語科教員を募集している掲示を見て、文部省に勤めていた郷里の先輩に相談したところ、紹介してもらい、教員として昭和十九年四月大村に來任した。

二、大村中学校の様子、大村での生活について

昭和十九年四月から国語科の担当と第一学年の学級担任を務めた。同じような年齢の若い先生はあと一人いた。一学級は四五〇名程度。国語の時間は文部省編さんの国定教科書を使っていて、戦意を高揚する内容もあった。古典では万葉集、枕草子、徒然草等を教えた。毎朝校庭で朝礼があり、朝礼台に校長先生が上ると、生徒代表の号令に合わせて、皆一斉に敬礼をした。訓話もあったが、全校顔合わせのような行事だった。学級に帰ってから今というホームルームの時間には、教育勅語を一斉に奉唱（暗唱）した。四大節（四方拜、紀元節、天長節、明治節）の日は、授業がなく式典があり、普段は奉安殿に奉安されている御真影を出して式場に安置し、国歌を斉唱し校長訓話を聞かせてから生徒を帰した。四大節にはそれぞれその時に歌う式歌があった。四大節の時は各家庭で日の丸を掲げた。学校では週に体育の他、武道二時間、学校教練二時間があった。教練には大尉が配属将校として学校に来ていた。

寄宿舎の舎監を命じられ、寄宿生（西彼杵などから来た生徒。一五名ほどいた。）の世話をしていた。玖島城の石垣の下、海の近く（恐らく板敷槽の下の駐車場のところ）附近に寄宿舎は二棟あり、真ん中に舎監用の一棟があった。寄宿生用に、生徒と唐鋤と鋤で、大村神社の石段の右側に防空壕を掘ったところ、粘土質で掘りやすく大きな穴が掘れたが、実際に使ったことはなかった。中学校の防空壕は校舎の下の方に朝鮮人を雇って掘らせたものがあった（二、四つはあったのではないか）。

終戦近くに、米軍がやってきて見られたらいけないからと、先輩教師の発意で、生徒が使っていた銃剣道の防具（一〇組もなかった）を、先輩とボートに乗せて海に沈めた。

三、学徒動員と十月二十五日の空襲について

四、五年生が六月、三年生は九月に第二十一海軍航空廠に動員された。一・二年生が残ったが、勤労奉仕によく使われていたので、授業をする時としない時が混在した。生徒はたいてい周辺の地区で麦刈りや、芋（さつまいも）

掘りに農家へ奉仕に行った。松原方面へ行くこともあった。

米軍の偵察機が夜間三回くらい来たことがあった。音で分かり、夜に空を見上げて分かった。

十月二十五日は誕生日が同じ病院の息子さんの家庭教師をしていたので、お祝いを一緒にと呼ばれていたが、空襲があり、それどころではなくなった。走りながら空を見上げると米軍機が編隊で飛来してきたのが分かり、恐怖と走っていたことでひどく喉がかわいた。

空襲時には寄宿生を大村神社の岸壁の防空壕まで連れて逃げたが、そこまで航空廠の書類と思われる葉書大の少し焼け焦げた紙が飛ん

できた。航空廠が爆撃される地響きを体感し、戦争は内地でも「こんな悲惨なめにあうのか」と感じた。この空襲で動員されていた生徒が三名亡くなり、またいつかは覚えていないが、あと一名の生徒が亡くなった。

四、召集について

昭和二十年に舎監室の机に向かっていたところ、学校の用務員さんが、「おめでとうございます」と召集令状を持ってきた。「西部軍管区司令部」に入れという内容だった。前後して大村中学校の教員も召集されていたが、当時は競争に行くのは当然のことだったので、特別、生徒や同僚から見送られることはなかった。寂しいものだった。実家に一度戻り、村長に挨拶にいったが、通常「ご苦労さまです」と言われていいところを、何も言われなかった。実家腹が立った。その後、一人で村社八幡宮に参拝に行った。六月二十九日に博多に召集され、電報班に配属された。暗号を解読するところだった。配属先には波佐見出身の英語の先生がいた。教員が多かった。入隊して一人一人呼ばれて実家の話などを聞かれたところ、経歴を見た教官から「嶋崎は大村中学勤務だが、私の甥を知っているか」と聞かれ、この教官は担任していた生徒の叔父に当たることが分かった。その後は優遇してもらい、自宅に呼ばれ



写真4 動員学徒之碑（長崎県立大村高等学校五教寮入口）

冷えたビールを飲ませてもらった。四桁の数字で言葉をつくる暗号の訓練を受けたが、覚える前に終戦になった。

召集先で、大連の時の同級生が将校になっていて再会した。幹部候補生になるように薦められたが、幹部になれば南方や前線にやられて死んでしまうかもしれないので断った。

当時の中学校の卒業証書には「砲兵向き」や「将校向き」ということが書いてあり、自分の証書には、「将校向き」となっていた。

五、終戦とその後の様子について

終戦（放送）は民家の縁側に置かれたラジオで聞いた。重大な放送があるから整列せよとのことで、放送ははっきりと聞こえた。玉音放送前に当時の国務大臣、情報局総裁の下村宏が「唯今より聖上陛下御自ら大詔を宣らせたまいます」と話され、それまで大元帥陛下、天皇陛下という言葉が使われることが多かったので、「戦争継続なら「聖上」というやわらかい言葉は使わないのではないか。これは戦争終結かな？」と感じた。

当時は、「勝たねばならない」と思っていたが、（以前から入っていた情報により）「米国の物量にかなうだろうか」と思っていた。

終戦後は、独身だから残務整理を手伝って欲しいと言われたので、大村に戻ってきたのは、昭和二十年十月十三日だった。自身の給料が実家に届けられていたのには驚いた。

米軍は大村に帰って来て初めて見かけた。現在の大村高校の卓球台で卓球をしていたところ、米軍さんが興味を示し、プレイさせて欲しいと言ってきたので、打ち合ってみたところ勝ち、「you are nice boy」と言われた。一度はまた、全く知らない米軍さんに扇が欲しいと言われ、物がないうちだったが、本町のお店で見つけて購入し、後日渡して喜ばれた。お礼にチョコレートをもらった。

■ 記録5

村井 敏郎 生年月日 昭和六年四月二日 八二歳(終戦時一四歳)

性別 男性

一・経歴について

家は立福寺の農家で、父は福重村役場に勤務していた。八人兄弟の四番目で兄二人姉一人、下に弟三人(一番下の弟が昭和十九年生まれ)妹一人がいた。兄が一人出征したがマラリアにかかり、復員後二三歳で亡くなった。當時村は農家が多く、農業が盛んな土地柄のせいか「百姓は百姓ができればよか」「上の学校に行く必要はなか」「勉強より仕事」という風潮がまだ残っていた。しかし、長男ではなかったので家業を継ぐわけもなく、農作業は好きではなかった。旧制大村中学校に進学した。当時中学校に進学する人は、小学校で五人ほどしかいなかった。田植への頃登校前に田起こしの手伝いをしなければならなかった日は遅刻し、怒られたことがあった。

二・小学校・国民学校の様子について

尋常小学校四年生の時に、福重国民学校に呼称が変わった。奉安殿は校門から入って本校舎(二階建)横にあり、先生からも言われていたので、行き帰りには必ず礼をしていた。また本校舎の廊下には肉弾三勇士の写真と大きな模造の爆破筒が展示されていた。

秋の稲刈りが終わると、大村部隊の兵隊さんたちが国民学校周辺一帯の広い田んぼを使ってよく訓練をしていた。大きな演習をする時は、学校の校庭が兵隊のお昼の休憩場になることもあり、その際校庭には武器(機関銃、大砲、迫撃砲)等が並べられていた。先生の許可を得て皆で見学しに行くと、係の人が詳しく説明をしてくれ

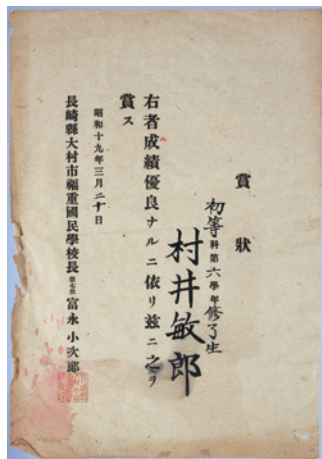


写真5 福重国民学校の賞状(個人蔵)

た。中には五〇代の人に、親子ほど年の離れた若い下士官から「軍人勅諭を言え」と休憩中に言わされていた。うまく言えないために厳しくされているのを見て可哀相だと思った。

慰問袋に詰める絵(戦車、飛行機など)は二、三回図画の時間に描いた。教科書や新聞に載っていた絵などを参考にした。学校の先生と大日本国防婦人会のたすきを掛けた人たちが職員室で慰問袋に(絵などを)詰めてから持っていくのを見た。後で慰問袋に対する御礼の便りが学校に来たことを聞いた。

四年生の時、学芸会では教科書で習った「軍神 広瀬中佐」の劇で、(村井さんは)広瀬中佐の役を、同級生が杉野兵曹長の役をした。婦人会、村議会議員、地域の偉い人が見に来ていたので、学校の先生から「しっかりやりなさい」と言われた。

村の人が出征して行く時は周辺地域の人が学校に集まり、生徒も全員整列して(出征する)本人や村長から挨拶があった後に皆で万歳をした。学校の先生が出征する時は松原駅まで見送りに行った。

四大節の時は、帯取(今富町)の大神宮へお参りしたが、その時は学校の生徒だけでなく、地域の人たちや軍服を着た在郷軍人会、婦人会、青年団の人たちが大勢参加して式典が行われた。

当時学級には疎開して来た人を含めて多い時は六年生一学級七六人はいた。学校には弁当を持って行っていたが、どんな品を食べているかを先生が弁当の中を見て回っていた。主食は雑穀入りで、おかずは大根の漬物、梅干だけだった。家では麦やかぼちゃや芋などを混ぜた食事が普通だった。白米を食べていたのは正月かお祝いの日など特別な時で、一年に僅かだった。

国民学校になってからは、少しずつ学校の教育は時局に即応する内容に変わった気がする。体力づくりのための体操、駆足、相撲(女の子もとった)があり、軍事に関係するものではモールス信号、手旗信号、剣道の基本動作、竹やり訓練箱などがあった。座学の授業では、桑の木やカラムシ(②)の皮、ラミー、マオランの皮が織物・洋服の原材料になると学び、実際に先生から言われて皮を収集して学校に持っていったことがある。ラミーやマオランは自

生してなかったので、育てている人からもらった。後日、学校では薄緑の国防色の洋服が配給され、皆喜んでいた。家では裏山に穴を掘ってウサギを飼っていたが、ウサギの毛が軍人用の毛皮になると学校で習った。

戦況が厳しくなる頃は、防空頭巾の携行、女の子はもんぺを履くなどの指導があった。生活のことですが初めての体験であり、何事も普通のことと捉え、違和感や疑問は抱かなかった。

三. 兄の出征について

兄は二〇歳の現役入隊で、昭和十九年十月一日に補充兵として召集され、大村の部隊に入隊し、遠征中の歩兵四六連隊所属となり、満州に出征することになった。父と二人見送りに行くに出征する部隊は既に装備を整え、営庭に整列していた。当時は既に戦況が厳しく、行先などの情報がスパイにばれてはいけないと思われるので、移動は夜間で、大村駅まで行進し、見送りの家族の人たちもその後が続いた。大村駅には、多くの人たちが見送りに来ていたが、部隊は足を止めることなく、無言のお別れをした。厳重な警備の中、全ての窓の銃戸が閉められた臨時列車に乗り込み、列車は静かに暗闇に消えて行った。その時、銃戸を少し上げ手を振っている人がいた。

(村井さんはその時)中学生になっていたが、歓呼の声で出征兵士が送られていた頃を思うと寂しく、兄を見送る時は悲しかった。只々無事に現地に到着することを祈るのみだった。

四. 軍馬の出征について

自宅の農耕馬を軍馬として出征させるのは当時とても名誉なことだったが、飼っていた農耕馬が出征したと学校から帰って聞いた時は、普段から面倒を見たく働く馬だったので、可哀相で練兵場に行行った。集められた多くの馬が仕分けをされていた。尻尾に赤い布を付けられた馬がいたので、何の意味があるのか尋ねてみると癖の悪い馬だと聞き、その中に自宅の馬はいなかった。会うことはできなかったが、安心して帰った。

五. 空襲について

昭和十九年十月二十五日の空襲前までは、B 29は立福寺周辺の山にばかり爆弾を落としていた。当時、山に防空

壕や工場関係施設を建設していたためかと思う。

空襲の時は焼夷弾や無数の小型爆弾が容赦なく落とされ、機銃掃射もひどかった。先が見えないほどの土煙が立ち、ひどい地響きと泥が舞う様子を見て、小学生の頃は戦争はよそでやるものと思っていたが、「これが戦争か」と実感すると空襲は怖かった。空襲時は家族や隣組の人たちと防空壕に入り、女の人は手を合わせ、念仏を唱え震えていた。

ある日学校の帰りに竹松地区には時限爆弾が投下されたと聞き、警報が解除されていたので友達三、四人と見に行くことにした。爆弾が投下されたのは黒丸方面、特に草薙部隊（今の郡中学校）付近と聞き、鉄道沿いに向かい、土手に伏せて見てみると、建物が被害を受けており、広場にはいくつも爆弾であいた穴があった。しばらくして広場でドンという音がして土煙が上がったのを見て、帰った。その後も翌朝まで爆発音が続いたと聞いた。

中学に入って列車を利用するようになってから、列車の待ち時間に、竹松駅近くの墓地辺りに出てお弁当を食べようとしたところ、グラマン機が何機も来て機銃掃射を受けた。とっさに掩体壕に飛び込み、難を逃れたが、戻ると弁当箱に穴が開いていた。駅構内では駅員や朝鮮の人が弾に当たり亡くなっており、駅周辺の変わり様に言葉もでなかった。福重の飛行場（滑走路）ができ上がる頃、既に竹松地区一帯には疎開命令が軍から出ていた。

中学に入ってから、家で新聞やラジオをよく見聞きするようになり、空襲も経験したので、報道と現状が違っていると感じ、おかしいと思った。

六、当時の生活と飛行場建設、周辺の軍事関連施設等の様子について

飛行機のガソリン不足を補うため、松根油の開発が始まり佐奈川内川の立福寺橋のそばに機械が設置された。一帯の山には松の木が多く、家で所有する山の松の木は全部切り倒され、作業部隊の三角兵舎も建てられた。つるはし等の道具も家に借りに来たので、貸してやった。切り倒した松を畑に放置された時は、農業ができなかった。

当時田んぼだった福重の飛行場建設は村に協力支援の要請があったようで、この集落からいつ何人出すという人

員の割当てが隣保班にあった。隣組で人手が不足している時は、学校が休みの日に、手伝いに行った。仕事は二人一組で、土や小石を畚もっこ（縄、竹、蔓を網状に編んだ運搬用具）に入れて天秤棒で担いで運んだ。

今富町の地堂には、早い時期から魚雷を整備調整し格納する隧道すいどう（トンネル）が掘られていたが、その前を流れる佐奈川内川の岸辺には兵舎（草薙部隊の分屯地か）が建てられていた。空襲が少ない頃は、兵隊の士気を鼓舞し、また地域の人との親睦を深めるためか演芸会が開催されたこともあった。芸達者な隊員が多く、地域の人たちはとても喜んだ。色々な面に効果があつたような気がした。

昭和十九年末から二十年初めには、海軍航空隊から胴体が布張りの赤トンボ（練習機）を疎開させ、葛城の堤の横の雑木林に隠してあつた。福重の飛行場（長さ約九〇〇メートル、幅約三〇メートルくらい）は完成したが、使用する機会はない。既に滑走路は）発見されていたのかもしれない。滑走路には偽造の飛行機を置き、カムフラージュしていた。翌日の空襲ではそれが機銃掃射を受けていた。本物の飛行機に被害がなくて良かったと思つた。

竹松駅の裏から鬼橋町、竹松町方面にかけては多くの飛行機（雷電、紫電改、一式陸攻など）が分散配置され、隠されていた。一機の赤トンボに爆弾を溶接して取り付けているのを見たが、火薬は入っていないと聞いた。翌日には（赤トンボは）もういなかった。JR大村線の線路から鬼橋町公民館辺りは野外分散の整備工場のような工場から遠目に、夜通し作業して飛行機を整備していたのを見たが、翌日の空襲で爆撃され被害を受けていた。それでもめげず、整備や土木作業を続けていた。掩体壕は、木材の枠組に土を載せて造つたものが多くあつた。

帯取高射砲台には、召集二度目の人たちが少し年配の人たちが砲兵として訓練をしていたが、うまくいっていないようだった。空襲や敵機が来ると上官（指揮官）は砲台の中で（射手の）そばに立って「撃て！」と指示を出していた。上官なら上手だろうから自分で撃てばいいのと思つた。

（鬼橋方面から）福重飛行場へ飛行機を運ぶため、矢次橋までの誘導路の建設を予科練の人たちが鬼橋町の二ノ宮神社そばで作業していた。その中に赤トンボに乗っているはずの先輩が一人いたので、翌日通学途中、隊列の横

を並んで歩きながらそつとゆで卵を渡してあげたりした。「ドカ練」と例えられたりしていた。

七. 旧制大村中学校の様子について

大村中学には列車で通い、大村駅からは整列して集団登校していた。中学生は、戦闘帽、足にはゲートルを巻き、背中に背嚢を背負いすべてが薄緑の国防色の出立ちをしていた。軍人（将校）に会えば、上級生が号令をかけ、列を整えて敬礼した。

戦局が厳しくなるにつれ教育内容もだんだん変わり、体力づくり、軍事教育、食料増産支援などが多くなった。軍事教育には退役軍人の将校が二人来ていた。農業支援は出征軍人の家庭へ農作業の支援に行き、学校では今の校庭のそばが田んぼだったのでそこで米作りをさせられた。農業の先生もいた。

部活は剣道、柔道、銃剣道、射撃、徒手訓練というものがあり、全て試したが最終的に教練をする徒手訓練に所属した。戦局が厳しくなるまでは部活動をしていた。

学校の廊下には「海軍兵学校合格」「陸軍士官学校合格」「海軍甲飛予科練習生合格」など合格者の名前が貼り出しており、興味があったので卒業後は職業軍人になろうと思った。幼年学校を受験したり少年飛行兵や少年戦車兵など考えたり、また昭和二十年六月、相浦海兵団の海軍軍事講習にも参加した。

二年生になってから学徒動員が始まり、航空廠から中学校に機材が運び込まれた。武道場が工場になった。朝礼から全て工場長や工員の指示で動くようになり、学校の先生はそばにいたが見回り役になった。

学徒動員生は、制服の胸に布製の学徒動員のマーク（何か字が書いてあったが詳しくは覚えていない）を付けて作業した。実技訓練はタガネ打ちとヤスリ掛けの練習をした。

タガネ打ちは、武道場横の広場に腰の高さ程で長さ約五メートル程の鉄製の訓練台が設置され、タガネを鉄の棒に当てハンマーでタガネの頭を指導工員の号令に合わせて強く打つ訓練。ヤスリ掛けは訓練台の万力に取り付けた鉄片に大きなヤスリを前後に動かして掛ける動作を、指導工員の号令に合わせて繰り返す訓練だった。この実技訓練は

双方とも簡単ではなく、手は傷だらけで時間がかかり大いに泣かされた。炎天下でもうまくできないと腕立伏せをさせられ、さぼると水をかけられたりした。

ある時、指導工員の人から萱瀬の疎開工場まで材料を取りに行くと言われて、(同級生の)三名でリヤカーを引いて取りに行った。途中で空襲に遭ったが、とっさに田んぼの側溝に飛び込んでやり過ごした。無事に学校まで帰りついた時はほっとした。

疎開工場の側溝掘りに行った時には、四角い鉄板に柄を付けただけの簡単なスコップを渡されたが、先がつぶれて用をなさず、こんな状況でいいのかと思った。「こんなものを使っているようで勝てるのか」となんとなく疑問に思い同級生に話したら、同調していた。二ヶ月くらい作業をしていたところ、終戦になった。

八・原子爆弾投下について

当日は当番で、同級生と配分所に弁当を取りに行っていた。途中、坂を上り休憩していると警報が鳴った。銀色に光るB29が北から南へ(長崎へ)飛んで行くのがはっきり見えた。そして落下傘が付いたような物体が見えた。フラッシュのように光り、地響きがした。強い爆風が来て、周辺の木の葉がちぎれ飛び、長崎の方を見ると大きな入道雲がもくもく上がるのが見えた。急いで学校に戻ると講堂の天井が落ち、校舎のガラスが何枚か割れていた。惨状という程ではなかったが、この辺りも揺れたのだなど驚いた。その日は校内の後片付けをして解散したと思う。その日帰宅時に、大村駅前の広場に原爆被災者が降されているのを見た。髪や顔がぼろぼろで見るに耐えなかった。応援救護の人たちが被災者を降ろすのにちよつと手を貸した。駅前の広場に筵(蓑など)で編んだ敷物を敷き、そこに並べて寝かされていた。海軍病院に運ばれるのだろうと思った。被災者はまだ汽車に多数残っており、乗ろうと思えば乗れたが、皆乗らなかった。徒歩で帰った。

九・戦中戦後の風聞について

広島の新型爆弾投下の後、登校中の会話の中で、日本でもマッチ箱くらいの大きさですごい威力のある新型爆弾

ができるそうだという話を聞いた。

あるところのある家は、空襲の時には必ず赤い布団を干しているので、スパイではないかという噂を聞いたりもした。

戦後、巷では「米軍は」日本を二度と立ち上げられないように骨抜きにするそうだと噂されていた。

一〇〇 終戦後の混乱と様子について

終戦後、少しの間農業をしており、お金になる仕事があると聞き、(日雇いのような形で)航空廠に後片付けの手伝いに行った。今の市立大村市民病院の先(現在の県運転免許試験場の辺り)に進駐軍のゴミ捨て場があり、進駐軍がそこにトラックで捨てに来ていた。使用したと思われる服、靴がたくさんあり、拾いに来る人がたくさんいた。進駐軍はその様子を写真に撮っていた。また、その近くで、銃を使った訓練をしていたが真剣味がなく軽い感じで笑いながらやっていた。腹は立つが仕方ないと思った。

現在の陸上自衛隊大村駐屯地は進駐軍の宿舎になっていた。駐屯地の周りを囲む側溝はそれまで汚水が流れ、悪臭がしていたが、進駐軍が来てからは牛乳などが流されたと思われ、白い水が流れて、良い匂いがしていた。また、(進駐軍の)若い隊員は裏道を通る人にこっそりと金網越しに煙草を売っていた。一度頼まれて買ったことがある。その当時、煙草は(簡単に)手に入らない配給制度があったので、芋の葉を巻いて吸う人もいた。

当時は酒も配給制度で手に入りにくかったので、飛行機の燃料だったメチルアルコールを飲んで体を悪くする人がいた。芋も「お芋さん」と「さん」付けで呼ばれるほど貴重な食材だった。

福重の防空壕、皆同や帯取の砲台には進駐軍が監視でずっと待機していた。高射砲台を壊していた。進駐軍はすべての軍事施設を調査管理し、破壊したりした。これが目的の進駐のように見えた。

戦時中、集会所や大きな農家で納屋などが空いている所を借りて、航空廠及び航空隊の人が航空機に積む資機材やカメラ等を密封して預けに来ていたが、終戦になってからよく分からない誰かが取りに来たらしい。

立福寺の佐奈川内川沿いの油出・河内方面の防空壕には銅板や資材などを入れていたが、終戦後に地域の人か復員の人を取りに来たと聞いた。丸山には要塞のような施設(実際指揮所として使われていたかは分からない)があり、隧道の中は机、椅子、ベッドなどが並べられており、宿泊もできるようになっていた。戦後、中に入ると将校の被服やサーベル(短剣)が散乱していた。水分が多く、じめじめしていた。置いてあった資器材や油が入ったドラム缶を持っていく人もいた。一度ドラム缶を外まで運び出したが、誰かに持っていかれた。

終戦になった途端、それまで学校などで大切に扱うように言われていた銃が川や側溝にたくさん捨ててあった。(その変化に)「負けたら駄目だな」と思った。

終戦になってから、それまで使用していた戦時下の教材は一切除去の指示があり、授業の初めに墨で塗りつぶしてから使っていた。歴史や地誌の教科書や本に墨が引かれて読めないのが悲しかった。

食べ物がなかったのはどこも同じで、多くの人々が農家に来ていた。商売人はリヤカーを引いて米や野菜を買いに来ていた。食べ物に満足できずつらい思いをした。米は配給や供出で制限されて売買してはいけなかったが、こっそり保存していたものを売ったりしていた。

戦時中に「米英駆逐」「米英兵は畜生だ、何をされるかわからん」とよく聞かされていたが、大村に来ていた進駐軍は自由で、満足した生活を送っていたようで、特に嫌な噂は聞かなかった。戦時中には、(今の西大村中学校に)撃墜され展示されたB29を見に行った時に、米軍の所持品も展示されており、それを見た時に(日本と違って)「贅沢だな」と感じたことがあった。

一・戦中・戦後の朝鮮の人たちについて

当時小学校の学級には疎開して来た人を含めて多い時は六年生一学級七六人はおり、その中に朝鮮人の子どもが二・三名いた。日本語がとても上手で年齢は二つ、三つ上だった。学校の先生は「仲良くしなさい」と言っていた。生活環境や言葉の発音(方言)などの違いでよく「口げんか」はあったが、「話せばわかる」で仲裁をすることもあつ

た。朝鮮の人で勉強がよくできる二人は中学に進学していたと思う。内一人は、似顔絵や絵が得意だった。戦後「さようなら」と言つて、寂しそうな顔をして国に帰つたのを覚えている。

福重地区では、防空壕掘りや様々な施設の建設作業員の朝鮮人の家族は、畑の掘つ建て小屋や佐奈川内川そばの三角小屋（軍人が使っていた兵舎と同じ）などに住んでいた。住まいにも行つてみたが、粗末な作りで可哀相な気がした。

朝鮮の人は終戦になって国に帰る人もいたが、竹松駅や大村駅の近くで色々な店を出して良い生活をしていた。昭和二十七、八年くらいまでであったと思う。芋焼酎を郡川や佐奈川内川沿の上流の藪や山の中で、また野岳の堤などでも遂次場所を変えて造り、売つたりもしていた。鉄や釘を集めて商売にしている人もいた。また、日本の女性と結婚して店を続けている人もいた。

■記録6

笹山 トヨ子 生年月日 大正十四年七月十三日 八八歳（終戦当時二〇歳）

性別 女性

一・経歴について

当時母と祖父母、兄で生活していた。兄は大変優秀で朝鮮で工業高校の教員をしていたが、戦争になって呼び戻され第二十一海軍航空廠で現場監督をしていた。（笹山さんは）大村尋常小学校卒業後、大村実践女学校（四年制）卒業。その後、佐世保海軍鎮守府で二つの試験を経て海軍施設部の職員として採用された。昭和十七年三月、佐世保海軍第二病院として大村に海軍病院が建設されており、そこに配属された。夏に開庁式があり、開院式が済んだ後、杭出津にあった海軍施設部の本部に移った。

二、大村尋常小学校、実践女学校での生活について

小学校の時、支那事変（当時はそう呼んでいた）があり、兵隊が出征する時は授業がなくなり、皆で日の丸を振って見送りに行った。また小学校六年生の時、陸軍から将校が来て、学級で話があり、「人的資源枯渇せりとせば」という言葉を覚えている。「生めよ増やせよ」の話であったと思う。一学級は四〇名くらいで男子クラス、女子クラス、男女クラスがあった。当時は教室の壁は取外しのできた（二部屋くらいは続いていた）。通知表は、甲・乙・丙の三段階評価だった。

夏の体育では、学校のすぐ目の前（現在の市役所付近）が海だったので、そこまで行って泳いでいた。農家の人が前船津からトマトを載せた二艘の船で海へまき、生徒一人一個ずつ浮かんでいるトマトを取って食べてよいと言われ、泳いで取りに行き、食べた。海水で塩気がして美味しかった。農家と学校で何か契約のようなものをしていただけではないかと思う。また、水泳の時は炒った大豆を入れた袋を片掛けで下げ、泳ぎ終わった後は海水でふやけてちょうど食べやすくなっていたので、食べながら帰った。

実践女学校では、消火訓練、裁縫、薙刀の稽古があった。薙刀には「一文字の構え」があったのを覚えている。裁縫は軍人向けの縫い物がほとんどで、落下傘も縫った。一度何十羽もある薄茶色のものを縫ったが何だったのか分からない。小学校ではそこまでなかったが、女学生になってからはむやみに男性と口を聞いてはいけなかった。そういう世間の認識だった。職場から男性がいつも家の近くまで送ってくれたが少し後ろを歩くだけで話はしなかった。でも中には、いつのまにかお付き合いをしている人がいて驚いたこともある。

女学校ではお花やお茶が正課目であり、女学校に来ているお花の先生に、一回の花代として生徒は一五〜一八銭を毎回払っていた。

三、海軍施設部の様子について

海軍施設部は海軍施設や工員住宅の設計、施工するところだった。一級建築士（二名）や現場監督がいて、監督

官として軍人がいた。施設部では、将校の住宅を建築していた。奏特^{そうとく}一号、二号、三号という区分けがあり、一号は大尉クラス用。上小路には現在も奏特二号が一、二軒残っている。二号は少尉、中尉クラスであったと思う。八〇〇九〇坪あった。

自分達は、普段は紺色の制服を着て勤務していた。鎮守府で採用された人にはバッジがあり、大村で採用された人にはなかった。施設部では一〇〇〇人が働いていた。女性は二〇〇人程度、下働きに朝鮮人も来ていたと聞いた。職場写真を見ると、バッジを付けた女性は他に一人しかいなかった。バッジを付けているかいないかで対応がかなり違った（自分は鎮守府採用でバッジを付けていたので、若い娘であっても敬礼をされた）。事務は「筆生^{ひつせい}」と言っていた。（笹山さんは）筆生として、資材の発注数の把握や管理の事務処理をしていた。材木は一石、二石で数えていた。書類を空廠や海軍航空隊へ書類を何度か届けたことがある。現場に行っていこうと言われ、城島瓦が一万枚届いた時、数を確認したりしなければいけなかった。

施設部には、設計士や一級建築士、技士（総監督）、技手（現場監督、出たり入ったりしていた）、技工師、工員、事務、書記、筆生、記録員（最初の数ヶ月、見習いのような形で記録員をして、その後筆生になる）、他に給仕がいた。

初任給は二一円五〇銭であり、終戦時には九〇円になっていた。当時一〇〇円あれば充分生活できた。退職金は一〇〇円もらった。当時は書記で課長、技師で部長クラスだったと思うが、書記で終戦の頃一五〇円くらいもらっていた。

職場には食堂があり、一カ月の食券をまとめて購入していた。食事は麦を混ぜ合わせたご飯、ない時は黒いカンコロ団子で、小さなうどんが付いていた。男性は足りていないことが多く、箸で茶碗を叩いていたので、カンコロ団子をあげたことがあった。

大村は空襲が多く、戦地扱いだだったので、年に二、三回戦地見舞いのバナナや水飴を貰えた。男性ではウイスキー

をもらう人もいた。外に見えないようにして持って帰り、祖父にあげたところとても喜んでいた。全員分はなく、幹部や職員だけしか貰えてなかったと思う。

当時は、職場の女性で班をいくつか作り、隊長が統括しその下に小隊長がいた(笹山さんは小隊長だった)。集会が定期的であり、一度臨時召集がかげられ、設計図を描いてるそばでおしゃべりなどする(騒いでいる)女性がいるので不謹慎だという指摘があり、一つ年下の後輩に注意したことがある。

昭和十九年くらいから職場でお花を習おうという話があり、池坊の先生を呼んで希望者だけ五〇名くらいで習ったが、昭和二十年になり戦局が厳しくなったのでなくなった。お花は昼休みとかではなく、勤務時間の中でしていた。

大工が徴用で来ていた。他の職員は県外から来ている人が多く、借家や寄宿をしていた。

四. 市民生活について

ふだん食べていたのは、麦が多いくらいのご飯、小麦を練ってつくったダンゴ汁、ふかし芋、ご飯をふやかしたお粥。魚はエイの配給が来ていたが、当時は冷蔵庫もなかったので腐ったようなにおいがした。それより漁師が東浦から鰯を売りに来たのを買って、家庭で塩漬けにしたものがあつたのでそちらを食べていた。

当時の「町」の認識は、片町からアーケードの方で、その辺りには長屋が多かつた。岩船から(南)は、お百姓さんが住んでいた。

月一回の屋敷神様のおまつりの時、七色菓子やお神酒を買いに行くのが(笹山さんの)当番だった。七色菓子とは、目分量で飴や色々な種類のお菓子を駄菓子屋さんが詰めたもの。七色菓子はお下がりを食べるのが、楽しみだった。当時お酒は一合でも売ってくれており(量り売り)、家庭用の徳利を持って、本小路の木下酒屋という酒屋に買いに行っていた。

五. 軍人とのふれあいについて

施設部が海軍病院にあった頃、昼休みに（笹山さんが）年上の女性職員と散歩をするのを入院中の軍人が毎日見ているので、二人で木の枝に文（手紙）を下げてみようということになった。その後、それぞれ別々の人から返事がきて、しばらくやりとりをした。退院される時に名前を手紙で明かされた。

母の話によると、戦時中全く知らない軍人が「休ませてください」と突然来ることがあった。座敷に通してお昼も出していた。芋や味噌漬けにしたたくあん、昆布、茄子など。夕方になると帰っていた。日中は瞑想をしたり、日記を書いたり、手紙を書いたりしていた。何日かするとまた同じ人が来る、ということが三人くらいあった。手紙を出して欲しいと言われて、母の名前で出してあげたこともあった。

どの軍人も知らない人だったので当時は何が分からなかったが、戦時中あれだけのことをしてもらって、もし生きていたら必ずお礼に来るはずなのに来なかったので、戦後母は「あれは特攻隊の人だったのでは」と言っていた。

六. 慰問と慰問団について

昭和十六年くらいに大村実践女学校の時、陸軍病院に二回ほど慰問に出かけた（当時の写真も残っている）。男性は勤勞奉仕に行っていたが、女性は縫い物が慰問へ出かけることがあった。学校から陸軍病院へ慰問に行くように言われ、数名で訪問し、病室ではなく、休憩所のようなところで演舞した。軍人と会話しましたが、慰問は命令のような形で義務的に参加した。

昭和十七、八年くらいに海軍病院の集会所に宝塚歌劇団が慰問に来たので、見に行った。一〇人くらいの団員が来ていて、



写真6 慰問時の笹山さん(左) (個人蔵)

何をやったか覚えてないが、「ささ(酒)やー、ささ」と歌い、演じていた。患者、看護師、職員が見に来ていた。団員は白っぽいズボンを履き、自分たちより、少し綺麗な格好をしていた。戦局が厳しくなる前、海軍航空廠か海軍航空隊に横綱照國が慰問に来て相撲試合もあった。

七. 十月二十五日の空襲について

空襲が始まると事務所の防空壕に入ったが、「女の人は危ないから忠霊塔まで逃げなさい」と言われ、民家の防空壕に入れてもらいながら、おさまると逃げるを繰り返すうちに波状攻撃が止んだので戻った。九時四十五分くらいから約二時間くらいの時間だったと聞いている。帰ると施設部の厨房のおじさんたちは「皆がお腹を空かせて帰って来るから」と逃げずにご飯を炊いていて、「おにぎりにするから手伝って」と言われ手伝った。あの空襲から逃げなかったことに驚いた。それからたくあん二切れ、白米のおにぎり一個を配った。

空廠は全滅に近く、現場を見た男性は「女の人には見せられない」と言っていた。「そんなに無残なことになっているのか」と、仕事が手につかなかった。二、三日経って「後日の参考のために」と現場視察にトラックに乗せられて行った。玄関だけ不思議と残っていたり、倒れている家屋ばかりだった。爆弾が落ちてできた穴に遺体を集めて、上から木材をのせて火葬していた。周囲には学徒が白い骨壺らしいものを抱えて泣いたり、呆然としていたりだった。次は直線状の壕で、中の五〇名が直撃を受けた現場だった。航空廠の防空壕は地面に沿って一本筋に穴が掘ってあったので、直撃を受けた爆風が外に逃げず、惨状になっていた。(防空壕の)穴の上に(三脚のように)三本の材木を組んで滑車で吊った筈で中から「泥」を引き上げていた。上がってきたのは、赤黒い土や泥のかたまりだった。形のあるもの(遺体)は上がってこなかった。血や内臓や衣服の切れ端が泥にまわりついており、長い髪がまわり付いているものは「これは女性」、靴や服で男性と分かるものは「男性」と分けて置いていた。においがひどく、一五回くらい引き上げるのを見ていた。

八・原子爆弾の投下について

母は婦人会に所属しており、被災者が海軍病院に送られて来た時、手伝いに動員された。(縦長い)桶に入れた遺体を吊り下げて、野田墓地まで運んだ。穴に埋めるのは男性の役だった。桶は急ごしらえの手製だったので、遺体から液体がこぼれ、おいがひどかった。服ににおいが付いたので、家に入る時は外で全て脱いで着替えてから入った。海軍病院に手伝いに行った話は終戦になって母から聞いた。母は原爆手帳の申請に行ったが便乗申請する人がいたので、駄目だと言われ悔しがっていた。

(笹山さんは)原爆投下時、十月二十五日の空襲以降は水計みずはかりの疎開事務所にいた。水計の疎開工場とは別で、もつと山肌だった。ピカッと光り、同時に窓の外の木がさーと揺れた。皆はとっさに机の下に潜った。外を見ると玖島崎の上に黒い雲が見えた。呆然としていたら、広島に出張して原子爆弾の話や焼け跡を見ていた男性が「これはおかしい。新型爆弾ではないか」と言い、平素は逃げない男性職員まで皆で外の防空壕に逃げた。しばらくして、何もなかった外に出ると前よりも大きく黒い、紫というか異様な色の雲が上がっていた。白い落下傘が一つ浮いていた。それも爆弾ではないかと思つて、落ちてこないか心配だった。夕方までに様々な情報が流れ、負傷者が大村まで来ているという話を聞いた。

九・終戦の様子と戦後の混乱について

十五日は、正午に「放送があるので聞いてください」と言われ職場で聞いた。ラジオは、ガーガーと雑音がしてよく聞こえなかったが、職員から「戦争が終わりました」と聞いた。驚き呆然していると、海軍さんたちが来てラジオが何だったのかと聞かれ、伝えたところ「やつぱりそうか」と言われた。米軍が来ると女子は襲われるので、皆髪を剃って汚い服を着なければいけないと誰もが言っており、(笹山さんは)職場の女性たちとどうしようかと話した。いっそのこと皆でまとめて殺してもらおうかと話し合ったが、そうならなかったので家に帰った。施設部は十五日に解散した。家に帰ると、女の子は危ないので、祖母の親戚で山奥の村長をしている人に(笹山さんを)預かつ

て欲しいと祖母とお願ひに行つた。何かあつたら引き受けると快諾してくれたが、「そんなことはないと思うよ」と言われた。

米軍はジープに乗って整然と現れたので、(笹山さんは)物陰に隠れて見ることがあつたが怖かつた。それから一、二年くらい間にパンパン(3)がやはり、近所でも(笹山さんと)同じくらいの年齢で米軍と手をつないで歩いている人もいた。二〇歳で終戦を迎えた。

■ 記録7

上野(永野)ノシ	生年月日	昭和二年六月二日	八六歳(終戦時一八歳)
馬場(永田)房子	生年月日	昭和三年二月九日	八五歳(終戦時一七歳)
南(原口)スミエ	生年月日	昭和三年七月三日	八五歳(終戦時一七歳)
高以良(西武)キミエ	生年月日	昭和三年十一月二十八日	八五歳(終戦時一七歳)

性別 女性 関係 同級生

一. 経歴について

(上野さん)当時、水田在住。農家。兄は兵隊に行つていた。

(馬場さん)当時、西小路(今の杭出津)在住。商家。父は町内会長。

(南さん)当時、松山在住。農家。自宅の三軒先から第二十一海軍航空廠に取られた。父は小倉に衛生兵として出征。(高以良さん)当時、西小路在住。農家。航空廠に土地を取られて須田ノ木に転居。

二. 出征時の見送り、千人針について

(馬場さん)小学生の時、大村駅まで竹に紙の旗を付けた日の丸を振つて兵隊さんを見送りに行つた。出征した家は木戸(玄関)や庭、外から目に付く所に日の丸の旗を掲げていたので、すぐに分かつた。千人針は女性が作つ

ていた。馬場さん始め、皆作ったことがある。当初は糸の先を残して縫っていたが、お腹に巻いた際にその部分にシラミが湧くというので、(先の出ていない)玉状にして縫い付けるようになった。

三. 動員について

榎上野さん、馬場さん、南さん、高以良さんの四人は四年制の大村女子職業高校の三年生の半ばから航空廠に動員された。緋あざで作ったもんぺを履き、名札と鉢巻を着けて、防空頭巾を持ち、下駄(緒は自分で作っていた)で歩いて通勤した。門には守衛がおり、学校から支給された鉢巻をしていないと駄目だった。門では敬礼していた。南さんは補給部に、それ以外の馬場さん達は飛行機部の第一部品工場に動員された。

(南さん)補給部では、落下傘たたみをした。

(馬場さん、上野さん、高以良さん)第一部品工場では、四角い小さな鉄板を型に合わせるためのヤスリかけ、大きい鉄板をハンマーで叩いての切断、グラインダーがけをした。

(馬場さん)グラインダーの際に飛ぶ火の粉が目に入り、病院に行ったことがある。目に入ることが皆よくあった。担任の先生は見回りをしており、生徒は工員の班の中に数人混じり、作業をしていた。

榎第一部品工場は、数カ月にわたって作業の講習があった。生徒は工手こうてから指示を受け、その上に工長こうちやうがいた。大尉、中尉が時々見回りに来ることもあり、その時は空気がびりびりしていた。

四. 他県からの生徒について

県外からの生徒も多く来ており、小路口おみちぐちの宿舍に寄宿していた。

(南さん)生徒の中には、作業が厳しくつらいので、故郷に帰りたくて病気のふりをして共済病院に診断書をもらいに行った人もいたと聞いた。

五. 十月二十五日の空襲と疎開工場について

(南さん)補給部で十月二十五日の空襲の際は、すぐに防空壕に入り惨状は見なかった。空襲から三日ほど後、当

時の自宅の近く(協和町)で、穴を掘り、その中で、空襲で亡くなった人の遺体を火葬していた。直接見てはいないが、においを覚えている。翌日から坂口のお寺に一週間疎開して、補給部が現在の向陽高校に疎開してからまた通いだした。

(馬場さん、上野さん、高以良さん)第一部品工場は本部のすぐ下(西側)にあった。空襲の時は防空壕に避難していた。空襲が止んでからすぐに家に帰された。航空廠のすぐそばの西小路の家には、航空廠を狙ったと思われる爆弾がそれてたくさん落ちた。昭和通り、松並辺りも焼けた家が多かった。

(高以良さん)空襲の後、家に帰る際に、爆風にやられて埋まった防空壕から若い男の人が掘り出されているのを見た。

(馬場さん)この空襲で隣家の防空壕に入っていた祖母と兄弟二人が、壕の入口前に爆弾が落ちて亡くなった。兄弟二人には筆筒を作る製作所で棺桶を作ってもらい、現在の西小路公民館のところが地区の斎場だったので、合同でお葬式をした。その後墓地に運び、土葬した。

当時、空襲時には、病院は大きく十字が書いてあったので爆撃を受けないはずだったが、(空襲で)ひどくやられて、診断書をもらいに行ったりしていた学徒が亡くなった。同級生も具合が悪くたまたま病院に行っていたところ、二人亡くなった。

(馬場さん、上野さん、高以良さん)翌日から第一部品工場は萱瀬の田下に疎開したので通った。工場も何もなかった。初めは防空壕掘りをした。大村中学校生など男の人が掘り、(女の人は)その土運びをした。

(高以良さん)工場が移転になってから、須田ノ木から萱瀬まで歩いて通わないといけなかった。出勤時刻に遅れることもあった。帰りは暗くなっていたので、母が線路まで迎えに来てくれた。

作業のない昼休みには、洗ったスコップで大豆を炒って食べた。そんな時、男女間の会話は普通でできた。一度、萱瀬で学徒が整列させられ、上級生か誰かから全員ビンタされていることがあった。

六. 灯火管制とその他の空襲について

灯火管制は警報が鳴ってから黒い布を被せ、赤と黒のカーテンを窓に付け、外に光がもれないようにしていた。外からも見て確認した。

空襲警報が鳴って庭から箕島の方を見ると、米軍の戦闘機を探照灯で照らしていたこともあった。佐世保空襲の時は、佐世保の方の空が真っ赤に見えた。

(馬場さん) 西小路は航空廠のすぐそばだったので、実家裏に焼夷弾が落ち、隣家は爆弾が直撃した。隣家に落ちた爆弾のかけらが家の屋根、畳を突き抜けて床下に刺さっていた。人が亡くなっても家が壊れても何の補償もなかった。実家が焼かれた後は、一歳八カ月の妹を背負って、警戒警報が鳴れば、杭出津一丁目(現長崎県東農業協同組合)の山(新城跡)。当時は森のようになっていた)、もしくは忠霊塔の下か大村公園の防空壕まで、避難していた。

B 29 ははるか上空を飛んでいて、下からは白い虫のように見えた。

七. 食生活と勤員時の食事について

覆当時は配給されるほんの少しのお米、大豆かす、主食はさつまいも。炒った大豆がおやつ代わりに袋に入れて腰から下げていた。

(馬場さん) 父が町内会長だったので自宅に配給物がたくさん届き、それを班ごとに七班に分けた。煙草もあり、煙管きせつにつめる用のものと紙で巻く用のものがあつた。

覆動員されている時は昼食に弁当が出ており、塩気があるタイ米に短く切ったうどんが入っていた。大豆かす、かぼちゃがおかずに入っていた。おいしくなかった。家の食事の方が良かった。弁当は弁当係が取りに行き、配っていた。萱瀬



写真7 第二十一海軍航空廠の弁当箱

(個人蔵)

工場にも弁当は届いていた。箱はアルマイトで、蓋がきちんと閉まらず汚かった。微用ダンゴは、南さんは並んで買ったことがあるが、萱瀬工場にはおやつで届けられていた。砂糖の入っていないきな粉がまぶしてあった。

八・原爆投下について

(南さん)原爆投下時、当番で小路口の寄宿舎に弁当を届けていた。工場に戻ると、先生たちは広島に新型爆弾が落ちたのを知っていたので「爆弾が落ちたからもう戦争は長くないよ」と言っていた。その日はそのまま通常どおり作業した。

(馬場さん、高以良さん、上野さん)山田の滝の下にあった水計工場に通っていた。終戦近くには、昼休みには竹槍の訓練があった。投下時は地響きのような爆音を聞いた。水計の山の間から黒々とした雲が真上に見えて、近くに爆弾が落ちたと思った。「あれに当たった人は立ったまま死ぬらしい」と聞いた。その日はすぐに帰った。

九・終戦について

覆終戦は自宅のラジオで聞いた。天皇陛下の声を聞き、「負けた」とわかった。「欲しがりません勝つまでは」と信じていたので負けるとは思っていなかったが、悔しさはなかった。終戦になり、もう空襲がなくなった、逃げなくていいと思うと開放されるような気分だった。

一〇・進駐軍の様子について

(馬場さん)進駐してきた米軍がトラックでゴミを捨てるゴミ捨て場が松山町(浄水管理センター辺り)にあり、そこに山のように洋服、靴、砂糖、チョコレート、缶づめが捨ててあった。町内で拾いに行った。リヤカーを出したこともあり、拾った靴を靴屋で女物の靴に作りかえて履く人もいた。なぜそんなに捨てていたのか分からないが、そう長くたないうちに拾いに行けなくなった。米軍がゴミを捨てている時は隠れたが、あまり怖くなかった。一度、外出して来た米軍が家に入り込んで来て、お茶を出したこともあった。近所では、実際結婚をする人もいた。

(南さん)家には三人女の子ばかりいたので、母から絶対に行くな、外をうろろするなといわれた。米軍が一度家に入り込んで来たこともあったようだが、母が対応していたので姿は見なかった。

■記録8

河内 トミ 生年月日 昭和十年九月二十五日 七八歳(終戦時一〇歳)

田峰千鶴子 生年月日 昭和十二年三月十五日 七六歳(終戦時八歳)

関 サナエ 生年月日 昭和八年十一月二十四日 八〇歳(終戦時一二歳)

性別 女性 関係 知人

一・経歴について

(河内さん)実家は福重の農家で、当時両親は病気で伏せており、九人兄弟の内、三人の兄は戦争にとられて不在。姉と兄で生活していた。兄は高等科で第二十一海軍航空廠へ動員され、なかなか家に帰ってこなかった。一九四四年の七、八月に両親が亡くなり、動員されていた兄は親の死に目に会えなかった。それからは姉が親代わりになり、(河内さんは)毎日畑に行つてその日食べる分の芋(さつまいも)を掘つて運んだ。当時農家なので配給は受けておらず、毎日芋や丸麦を食べていた。畑があったので、両親が亡くなった後も生きてこられたが、極貧の生活だった。

(田峰さん)実家は福重の農家で、父は出征し、母しかいなかった。師範生の軍人が二人寄宿していた。鹿児島の人と聞いていたが、食事の準備はしていなかった。

(関さん)実家は鈴田の農家で、父は、馬車引きをしていた。

二・福重国民学校について

現在の福重出張所の前にあったが、航空隊の滑走路ができるといふことで矢上(福重町)に移された(河内さん、

田峰さんは矢上まで通った)。国民学校に奉安殿はなく、御真影は職員室に飾ってあったと思う。

(河内さん)学校の近くの物置で海軍の軍人が皮のベルトで叩かれている音を聞き、かわいそうだと思った。

空襲がひどくなると(福重地区内の)各権現で授業があった。一度学校に通学してから集落毎に権現に行った。そこで何を勉強したかまでは覚えていないが、集められたのは覚えている。田峰さんは大神宮に、河内さんは野田権現に集まった。

三. 大村大空襲と空襲について

警戒警報は間を切って数回、空襲警報は続けて鳴らされていて、サイレンの鳴り方に違いがあった。警報は農協かどこかで鳴らしていた。

(河内さん)航空廠がやられていると聞き、小高い山に登ってB29が爆撃する様子を見ていた。B29はよく焼夷弾をこの辺りに落として

いき、野田の墓辺りには当時爆弾によって地面にあいた穴があった。今でも(草が生えて判別しづらいが)一つ残っている。焼夷弾はとりもちのようなどろっとした油をまきながら落ちていた。落ちた後も太陽の陽が当たったり、気温が高いと自然発火することがあったので、触るなど言われた。近所の家が焼かれたことがあった。

四. 高射砲台と防空壕について

大神宮のそばに高射砲台があった。その近くには兵隊が掘ったという防空壕がたくさんあった。

(田峰さん)B29はよく来ていたので、(高射砲で)撃っているのを見たことがある。(高射砲の弾が)低くて全然届



写真8 昭和16年時の福重国民学校ラジオ体操風景
(上野盛夫作成「銃後の郷土」電子複写版)から)

かないとおじさんが言っていた。砲兵もいた。兵隊が掘った防空壕は真っ直ぐで横穴がめぐらしてあるものが多かった。

(河内さん) 丸山には山に沿って階段までつくられた立派な軍の防空壕があった。大抵各家には防空壕があったが、家のものは丸く掘ってあり横に広がった。

(田峰さん) 警報が鳴るたびに中に入り、入ったままご飯を食べたり寝てしまったりしたことがある。家の防空壕にはよその人も入れてあげていたので、一度壕の中で(お礼として)きな粉ご飯をもらって食べた。

五. 原子爆弾の投下時について

(河内さん) 学校で空襲警報が鳴り、学校の防空壕の中に逃げた。ぱりぱりという飛行機が通過する音がして警戒警報になったので、外に出たところ、ドカーンという音がした。友軍機と間違えて警戒警報に切り替えたのではないかと皆が言っていた。その後、黒い煙があがったのを見た。

(田峰さん) 庭で遊んでいた。ドーンと音がしたので見たところ黒い煙があがっていた。それからしばらくして「爆弾が落ちた」と聞いた。

六. 食、衣服、その他の生活について

当時芋、芋ご飯、麦ご飯をよく食べていた。田畑を持っている人は米の配給を受けていなかった。松原から鰯を売りに来ていたので、鰯やシヤコも食べていた。

(田峰さん) シャツは(シヤコ)は浜の親戚がくれた。野菜は各家で作っていた。牛は農作業に必要なため、各家に一頭はいた(田峰さんの実家には馬もいた)。おやつ代わりにモクの実、ハスの実、シイの実を採って食べていた。当時矢上の学校の前にはハスがたくさんあった。

(河内さん) もんぺは、各家で着物や帯から母が作っていた。帯で作ったものは硬く、はきづらかった。ももずれしていた。河内さんが履いたもんぺは袴と同じつくりで、前布、後布に分かれており、それぞれについた紐を

腰の部分で結んで固定するしくみになっていた。

(田峰さん) 当時は藁草履が多く、花緒は藁だったがそこに赤白の布をあてたのが良いものだった。母が編んでくれている(関さん、河内さんは自分で編んでいた)。遊ぶ時や走る時は裸足が多かった。

復お風呂は薪で焚いた五右衛門風呂に、毎日入った。洗髪は椿の実から油をしぼりとった後のかすを、てんげ(てぬぐい)にくるんだものを頭にこすり、洗っていた。

当時ほとんどは徒歩で、その他自転車もあった。また荷物を運んだりするにはリヤカー、馬車が多かった。

七. 灯火管制について

復灯火管制はあったが、警報が鳴ったら裸電球に風呂敷やかさを被せていた。鳴らない時はそのままでも夜も電気はつけて良かった。防空壕に逃げる時は必ず電気を消すように言われていた(鈴田でもそうだった)。

八. 松根油について

(河内さん) 松の木は山にたくさんあったので、採りに行っていた。木の根っこを掘れば、根は外側の白い部分と内側の赤い部分があり、赤い部分に油があったので、それをそのまま採ってきてロウソク代わりに行っていた。

(関さん) 松の幹にV字型に切り込みを入れて(V字型の先端の部分に)容器を提げているのを見たことがある。何かその状態にしておいて染み出てくるのを待ってから採っていた。

九. 国防婦人会について

(田峰さん) 福重の滑走路は、男手が既に少なかったので国防婦人会の人たちで作っていた。(婦人会には) 母も所属していた。白い割烹着にたすきをかけていた。千人針も婦人会で作っていた。

(関さん) 母も婦人会に所属し、駅によく見送りに行っていた。

一〇. 終戦について

(河内さん) どうやって終戦を知ったかは覚えていない。二人の兄は戦死し、木箱に名前が書かれた木札が入った

ものが帰ってきた。生前それぞれ残していた髪の毛とその木札をお墓に入れて埋めた。一人は鹿児島にいたので無事に帰ってきたが、父を喜ばせようと恩賜の煙草（アルミのような素材の菊の御紋が刻まれた容器に入っていた）をもらって帰ってきたが、（父は既に）亡くなっていた。航空廠に動員されていた兄は、戦後長靴をもらって帰ってきた。

（関さん）どうやって知ったのか覚えていない。

（田峰さん）庭で髪を洗っている途中にラジオを聴いた母から「日本が負けた」と聞いた。

（田峰さん、河内さん、関さん）当時は、「日本は負けたのか」と思ったが、その他の感情はわかなかった。

二・終戦後の様子について

【復進駐軍が来て、駅で見かけたことがあったが体が大きく怖かった。

（田峰さん）チューインガムなどを子どもにくれていられるらしいと聞いたが、行ったことはない。

【戦時中から食糧難だったので、終戦後は特に食生活が変わることはなかった。戦後は彼杵から鯨を売りに来ていて、かぼちの汁に入れて食べるとおいしかった。

長崎・佐世保から大きなリュックを背負って「野菜や米を売って下さい」と言ってくる人がよくいて、着物と交換したりしていた。一軒一軒回っていて、列車に乗ってきていたと思う。

（田峰さん）庭先に落ちているような古根芋でも良いのだからと言っている人もいた。

（関さん、河内さん）戦後片腕を失った元軍人が、肩からゴムを提げてよくゴム売りに来ていた。一人で歩いて回っていて、買わないと機嫌が悪かったのが買ったこともあった。

（田峰さん）（ゴム売りに来るのは）いつも同じ人で、〇〇辺りに住んでいる人だと聞いたことがある。

【覆琴弾きさん（当時そう呼んでいた）が夫婦で一軒ずつ回っていた。弾き手は目の不自由な人だった。玄関先で琴を弾いてはお米やお金を受け取っていた。

戦後も、靴がなく、長靴や運動靴は学校で支給され、くじを引いて当たった人だけがもらっていた。中学校にあがるくらいまでそういう状況が続いたので、藁草履わらぞうりや下駄げたを履いていた。

(田峰さん)それまで薪で炊いていた。ご飯がガスになったのは昭和三十五、六年くらいだった。

(田峰さん、河内さん、関さん)(農家にとっては)終戦になって特別生活が変わったと感じることはなかった。

記録

山崎 ムメ 生年月日 昭和三年九月一日 八五歳(終戦時一七歳)

藤崎 松江 生年月日 昭和四年十二月十五日 八四歳(終戦時一六歳)

性別 女性 関係 知人

一、山崎さん、藤崎さんの経歴について

(山崎さん)木場の農家で、一〇人家族。父が軍属で海軍病院で働いていた。大村尋常小学校高等科を卒業後に、同じ敷地内にあった青年学校(名前が途中で実践女学校に変わった)に行き、本科(三年)を中退して父の口利きで海軍病院の薬局で昭和十八年八月から働き出した。

(藤崎さん)上久原の農家で、一人家族。大村尋常小学校高等科を卒業。当時は仕事をしていないと第二十一海軍航空廠へ働きに行くように町内会長が話を持ってきていた。兄は町内会長の徴用の話に応じて徴用工具として佐世保の工廠で働き、福石工員寄宿舎にいた。徴用の話があるのを当時の徴兵の「赤紙召集」に対して、「白紙召集」と言っていた。(藤崎さんは)航空廠が家から遠く、通えないので海軍病院で働くことにした。昭和十九年四月一日が初出勤日だったが、同日に職業安定所(当時は本堂川の先にあった)から航空廠に働きに行くように呼出しがあり、今日から病院に行くことになっている旨を話すとともに帰してもらえた。十三時三十分から勤務になっていたので走って急いで向かった。職業安定所には軍人のような男性職員がおり、呼び出され

て話すだけでも怖かった。

二・大村小学校について

〔複〕毎朝八時三十分くらいから朝礼があり、生徒がグラウンドに整列して向かって右手には二宮金次郎像（銅像）、左手には奉安殿があった。奉安殿は中に御真影が入っていると聞いたが、中を見たことはない。朝礼の時に皆で参拝した。途中で二宮金次郎像も奉安殿も金属供出でなくなった。当時は「金次郎像は兵隊に行かす」と言っていた。（藤崎さん）六年生の時に薙刀の練習があった。女の先生が袴をはいて教えていた。長い薙刀を持たねばならなかった。一文字の構えというのがあった。

三・青年学校について

〔複〕青年学校は、今の大村小学校のグラウンドを仕切って建っており、現在の交番近くの門（正門）が青年学校の入り口だった。農学校のようなもので、裁縫もあったが苗を植えたり、田を耕したり主に農作業をしていた。薙刀の授業もあった。

四・大村海軍病院での仕事について

〔複〕戦時中、患者は病気の軍人が主で外科もあったが、内科が多かった。（山崎さん）薬局で薬剤師の助手として調剤して薬を紙に包んでいた。相当の数の薬を包まないといけなかった。勤務は八時から十七時までだった。

（藤崎さん）食堂で軍医さんたちの給仕をしていた。軍医さんは当時二〇数人ぐらいいて、比較的若い人が多く一番若くて二一歳の人がいいた。主に食堂でご飯をつくことが仕事だったので、当初はとても恥



写真9 大村海軍病院

（長崎原爆資料館所蔵）

ずかしかった。四月二十九日の天長節の時には食堂で軍医たちに酒の酌をしないとイケなかったが嫌だった。全員に注ぎ終わったらすぐに食堂を逃げ出したが、追いかけて来た軍医に連れ戻され、また注がないとイケなかった。早出は六時から、遅出は八時三十分からだった。

覆当時病院にはタイムカードがあり、「退庁五分前」というアナウンスが流れると、五分前には皆が列をなして並んでいた。帰る時には荷物点検があり、持ち出そうとするものがないか兵隊がチェックしていた。

五. 給料と勤務の時の服装について

(山崎さん) 薬局では女性は袴を着て働いていた。学校のセーラー服を着て通い、薬局の中ではセーラー服の上から白衣を着ていた。最初のお給料は五三銭。昇給で五銭、一〇銭という単位で上がっていった。病院へは一〇銭の下駄を履いて通った。上履きは藁草履(わさぞう)(つのんぼと呼んでいた)を使っていた。

(藤崎さん) 祖父が花緒に布切れを巻いて作ってくれた藁草履を持って行ったが、盗まれたことがある。四大節の時は着物を着て仕事に行った。最初のお給料は四五、六銭くらいだった。

六. 海軍病院の様子、衛生兵、軍医について

(藤崎さん) 病院には衛生兵がおり、藁雑巾(藁の縄を巻いてつくったもの)で油ぶきを日課でしていた。そばで上官(下士官)が厳しく指導していた。衛生兵が殴られているのを見たこともある。

衛生兵が戦地に行く時は「帽振れ」と言ってお関から皆で列になって見送っていた。軍医を見送ったことはない。「(軍医を)最近見なくなった、何だろう」と感じたら、大抵戦地に出征していなくなっていることが多かった。外地から帰った軍医から「食べたことないだろう」と、チョコレートをもらい食べたことがあった。生まれて初めて食べたチョコレートはとても美味しかった。

当時、軍医と看護師が親密になり、付き合っている人もいたと思う。

(山崎さん) 薬局で軍医(宮本中尉)の送別会をしたことがあり、すぶくれ(素彫れ＝餡なし)まんじゅうのような

パンを作って皆で食べ見送った。遠方から海軍病院に來た軍医は近くの民家に間借りして暮らしており、実家でも貸していた。間借りしている軍医から日赤（日本赤十字）の看護師へ手紙を託され、届けたこともある。

七. 慰問について

（藤崎さん）病院の娯楽所、講堂で慰問が時々、年に一回ほどあった。見に行ったことは、ほとんどない。戦後、「愛国の花」を慰問で踊ったことはある。その頃はまだ軍医がいたと思う。

（山崎さん）中村メイ子（[4](#)）が七歳ぐらいの時に慰問に來たので、見に行つた。「お喉が痛いですが、兵隊さんのために歌います」と言い、歌つたのを覚えてる。

八. 十月二十五日の第二十一海軍航空廠への空襲について

（藤崎さん）空襲の時、第四病舎の下にあった防空壕に入っていた。守衛が避難していた人たちに航空廠の様子を交代で見えるように言つたので、防空壕の外に出てみると、六機編成の航空機がぼろぼろと航空廠へ弾（焼夷弾）を落としていた。当時は建物が現在のように多くはなく、病院の高台からよく見えた。その光景を見て、「おそろしか（恐ろしい）」と言つて泣いている友人もいた。空襲が止んで病院に戻り二階から見たところ、腹部に重症を負つた人や火傷のひどい人がたくさん運ばれてきていた。その後、急な手術が入つたので軍医に夜食の準備をしなければいけなかつた。

（山崎さん）空襲で患者が増えたので、看病の手伝いをした。患者は重油で焼かれて火傷で丸く腫れた顔に目、鼻、口の穴を開けたガーゼが被せられ、体は真っ黒に焼け焦げていた。その夜は病院に泊まつたが、一晩中「水、水」という声が聞こえていた。水をあげてはいけなかつた。怖くて一睡もできなかった。

九. 防空壕について

防空壕は病舎ごとに職員用のものを作つていた（穴を掘つて、上に土を被せたもの）。第三倉庫の防空壕は大きく何十人も入れたのに満員で入れないこともあつた。久原二丁目の旧清和園跡地の下や靈安所の前にもあつた。

(山崎さん)大豆を炒って醬油をかけたおやつを防空壕に持って行き、食べていた。

覆当時はどの家にも庭に防空壕があり、(山崎さんと藤崎さんの)家の庭先にもあった。

一〇. 米軍による機銃掃射と照明弾、B 29について

(山崎さん) B 29、24はよく飛んで来ていた。きらきらと光っていたのを見た。

(藤崎さん) B 24が天草の方から来た際、伝令から「総員退避」がかかったが、好奇心から友人数名と逃げずに見ていたところ、低空飛行でぱりぱりと音がして機銃掃射を受けるところを見た。搭乗員が望遠鏡でこちらの建物の中を見渡している様子が見えた。長崎師範学校女子部と大村高等女学校(現在の長崎県立大村城南高等学校)の窓を全て撃って飛んで行った。それから慌てて逃げたところ、「今逃げているのか」と怒られた。あとから見ると釜川内の方が燃えていた。伝令がB 24やB 29という区別はどうやってしていたかは分からないが、B 29の飛来する音の方が腹の底にこたえるような音がすると言っているのを聞いたことがある。

夜中に空襲警報が鳴ると、親に起こされてまとめた荷物を持って庭の木の下に運び、外に避難していた。敵機から落とされた照明弾で辺り一面は昼間のようなだった。火事のような明るさだった。父は(敵は照明弾を落として)「隅から隅まで見ているんだぞ」と言っていた。どこに隠れても見つかるような気がして恐ろしかった。

戦時中、有明海に落ちたB 29が展示されているのを見に行った。B 29の窓は割れ、椅子は倒れており、「(機体が)大きい」と感じた。憲兵隊には搭乗していた米兵の遺体が運ばれて来ており、父は遺体が車からひきずりおろされた様子を見たと言っていた。その後(遺体は)町墓にまつられ、最後までどこかのおばあさんが供養したらしい話を聞いた。

覆この頃になると毎日防空頭巾を持って、着物の縮ちぢや緋ひでつくったもんぺをはいて病院に通っていた。

一・原子爆弾投下と当時の海軍病院の様子について

―投下時―

山崎さんは昼食のお弁当を開けようとしていたところ、藤崎さんは十一時四十五分からの食事運びに出ようかとしていたところだった。室内にいても分かるほどピカッと光り、爆音がして伝令から「新型爆弾投下」とのアナウンスがあった。

(藤崎さん)二階から外を見ると、落下傘が三つ浮いていた。雲はかぼちゃのように丸く、中は赤々と火が燃えているように見えて、外側は黒く、もくもくとしていた。伝令から「毒ガス」「落下傘爆弾」と次々にアナウンスがあり、職員は皆第三倉庫の防空壕に逃げた。爆風がひどく、第三倉庫のガラスは四二枚割れていたと聞いた。

―投下後―

榎その日の午後には原爆で被災した人たちがバスやトラックで運びこまれて来た。海軍病院からも医者や看護師が救護班として長崎へ向かったと聞いた。

(山崎さん)第八病舎でピンセットを使って(患者の)蛆むしとりをした。髪の毛がなく、火傷がひどい人は体が腫れていて人間ではないようだった。被災者は「水、水」としきりに言っていた。亡くなった人は、霊安所の前に担架にのせて並べられていた。

―帰宅後―

(藤崎さん)自宅はガラスが割れ、襖が爆風で倒されていた。母は「爆弾が落ちたから今日は帰って来れないかもしれない」と心配していた。病院で見たことは家族には話さなかった。

(山崎さん)帰宅後、家で病院での話をした。「おそろしゅうて、何もしてやれんかった」と言ったら、父から怒られた。

(藤崎さん)原爆投下の翌日、患者が運ばれて来ると、軍医から「可哀相なくらいひどい状態だから、行って見て

みなさい」と言われて見に行つたが、怖くてすぐに逃げた。それから、第十一病舎で患者にご飯を食べさせた。患者の顔には目、鼻、口の穴を開けたガーゼが被せられていて、口までご飯を持っていつて食べさせなくてはいけなかった。最初は怖くて逃げてしまい、日赤（日本赤十字）の看護師婦に怒られた。背中にはガラスの破片が刺さっており、目から蛆がわいている人もいた。

二二 終戦について

（山崎さん）当日、病院では正午に「重大放送」があるから聞くようにアナウンスがあつた。皆で聞き、よく分からなかつたが、ラジオが終つた後、終戦になつた旨を伝えるアナウンスが病院内に流れたような気がする。天皇陛下がラジオで話されることは一度もなかつたので、天皇陛下の言葉「終戦と云つた予測もほんやりとあつたが、まさか負けるとは思わず、シヨックだつた。「神風が吹く」と信じていた。家に帰り、庭で空を見上げると頭上に大村海軍航空隊から飛行機が何機も飛んで行くのを見た。戦争が終わり、最後の飛行をしているのかと思ふと、終戦を実感し涙が出た。

（藤崎さん）「重大放送」があると云われ、何の放送かと思つた。食堂にラジオがあつたので皆で聞いたが、がさがさ雑音が入り、音が飛んだりして何を言っているのかよく分からなかつたが、ラジオを聞きながら泰山院長は涙を流し、（終戦と知つて）落ち込んでいた。家に帰ると十五日はお盆で家族は皆出払つており、母が一人いたので「戦争に負けたよ」と話した。終戦になつたと聞いても、特にびんとこなかつた。

二三 終戦後の混乱と海軍病院について

〔復〕終戦になり、「米軍が来る」と町内では大騒ぎになり、女の子は襲われたりするという噂が飛び交つた。

（藤崎さん）朝礼の時に国旗、軍艦旗の掲揚をしていたが、終戦になってから病院の玄関前で旗を焼いたと聞いた。御真影は院長室に飾つてあつたが、その後どうなつたかは分からない。

院長先生が連れた米兵（多分医者であつたと思う）が五人病院に来た。英語で話しながら案内していた。米

兵を見ると怖くて走って逃げていたところ、シンクリア少佐から日本語で「何もしませんよ」と言われた。その他の米兵も数名出入りしていた。食堂では米兵にパンとスープを出していた。

院長室にあったソファや高級品は、進駐軍が川も越えられるような車両で玄関まで乗って来て、全て持って行くのを見た。

長崎大学から教授が数名来た際に、一緒に来ていた永井隆博士を食堂で見た。院長と移設について何か採めているようだったが、教授陣の給仕には行かないように言われたので行かなかった。

(山崎さん)終戦後一旦解雇されたがすぐ再雇用され、昭和三十年まで働いた。

(藤崎さん)終戦後も継続して昭和三十一年四月まで働いた。

二四 当時の食生活と海軍病院食堂での食事について

〔榎家〕で米は作っていたが、供出して食べられなかった。

普段は、芋(サツマイモ)、丸麦、カボチャ、そうめんを入れただんご汁、米の糠殻を取る時に出たくず米、トウモロコシのしぼりかす、ダイコンやカブの葉などを食べていた。一帯は農家が多かったので、どの家も畑でダイコンや白菜、芋は作っていた。茹でた芋と豆を練って団子にして食べていた。

当時は大きな丸いひょうたんを水につけて中をくりぬいて、お櫃にして使っていた。各家で作っていた。保湿がよく、中に入れたものはおいしかった。

(山崎さん)外米(タイ米のような長い米)やトウモロコシのしぼりかすが配給されていたがおいしくなかった。

(藤崎さん)外米も配給されれば良い方で、グリーンピースが配給されることもあった。配給は町内によって物が違っていた。

(藤崎さん)海軍病院の食堂では、毎日白米が出ており一汁三菜。おかずが四種類は出ていて、准士官以上と軍医が食事に来ていた。お昼にお刺身が出ることもあり、軍医が食べていた。兵隊さんは麦飯だった。(戦時中は)

あれだけ物があつたのに、終戦になったその晩からがらりと変わり、トウモロコシの粉で作ったパンが出るようになったので、とても驚いた。トウモロコシのパンは、見た目は茶色い普通のコッペパンのようだったが、大豆のしぼりかすや豆かすが入っていたので、なんともいえない変な匂いがした。味もなく、パサパサとして美味しくなかったので、皆食べていなかった。

二五 日本赤十字の看護師について

日赤の看護師は、県外の愛媛、徳島、佐賀、島根などから来ていた。病院に働きに来ていた人たちをまとめて、軍属と呼んでいた。

■記録10

福地 勝美(故人) 生年月日 大正十三年十二月十五日 八九歳(終戦時二二歳)

性別 男性

一 経歴について

鹿児島県鹿児島市出身。昭和十七年二、三月に呉海軍工廠への徴用工員の呼出しがあつたが、工廠から宿舍が遠く、仕事もきついことで有名だったので、「それなら兵になった方がいい」と思い海軍に志願したところ、落ちた。しかし、看護兵か主計兵なら二名ずつ空きがあるということだったので、看護兵を希望した。幹部実習で戦艦「大和」に乗った。主砲の中に入ったこともある。ツルツル滑りやすかつた。大和は、戦艦の周囲二〇〇メートルに魚雷が侵入した場合それを電探(電波探信儀)で察知し、はねかえしていた。実習中は晩御飯後には罰直(5)があつたので、夕方がるのが怖かつた。その後、第三四三海軍航空隊についてフィリピンへ派遣され、負傷兵の治療に従事した。激戦地だったので命からがら帰国し、鹿屋に配属された。昭和十八年七月一日に衛生兵先任兵長になつた。昭和十九年六月に大村へ転勤になり、海軍病院に配属された。その後、病院施設が分散し海軍航空隊剣部ケンブ隊付きになり、松

原小学校の講堂におかれた医務室に勤務した。前任兵長（福地さん）の下には衛生兵が二〇人おり、衛生兵長の上には軍医がいた。昭和二十年に結婚。

二．衛生兵の仕事と日常について

衛生兵の一日は、朝から入室患者の治療、その後点呼があり一日の仕事の流れを確認した。医務室に来る患者はほとんどが外傷で、傷がひどくて手術が必要な場合は海軍病院に搬送していた。（福地さんの）部下には逃げ出す者もいた。何か理由があったのだらうと思ひ、追及しなかったが、捕まったと思う。その後は、会っていない。

海軍航空廠の工員も治療に来ていた。航空隊員は年齢の若い者ばかりで、殴られてはよく泣いていたのを見たことがある。

空襲の時は、松原駅から上がった所に鉄工所があり、そばに防空壕があったのでそこへ避難していた。二五、六人が中に入れて、地域の人たちも使っていた。警報の度にそこまで避難するのが大変だった。戦争は「絶対に勝つ」と信じていた。

三．憲兵隊について

当時憲兵隊は厳しくて有名だった。同級生で憲兵になった者がいたが、動作一つとってもきびきびとしており、違った。大村には、アーケード内の東本町三九〇番地辺りには憲兵隊があった。同じ憲兵なのに陸軍、海軍でそれぞれ指揮系統が別なのはなぜだろうと思ったが、海軍と陸軍はそれだけ仲が悪かった。陸軍の憲兵隊そばには防空壕があった。終戦になりその中で自決した人がいると聞いたことがある。



写真10 大村海軍航空隊（絵葉書）

（長崎歴史文化博物館収蔵）

四、原子爆弾の投下と治療について

投下時は、衛生兵を防空壕に避難させ、(福地さんは)壕のすぐそばで待機していた。それからピカッと光り、何かおかしいと思い、急いで壕の中に入った。

その日の夜、松原駅から負傷者の搬送が始まり、治療に従事した。運ばれてくる患者は、動員と思われる若い女子が多かった。松原小学校の教室、また運動場にも筵を敷き、寝かせた。

当時、イスラピンという薬がなく、それを松原の浜で採った海水に溶いて湿布薬を作り、患者に貼るくらいの治療しかできなかった。搬送されて来た患者のほとんどが既に手遅れの状態だった。亡くなった人は焼く場所がなかったので、海軍航空隊の敷地内でガソリンをかけて火葬した。

五、終戦とその後について

終戦になるまで負けると思ったことはなかったが、八月十五日には放送があるから聞くように言われ、ラジオがある近くの油屋まで聞きに行った。しかし、陸軍では放送があることを知らない者もいたと聞き、これだけ伝達形式がうまくいっていないのでは負けても仕方ないと思っ

た。
終戦後、国立病院で看護に当たっていた兵がほとんど復員してしまい、患者だけが残されて大変なので手伝って欲しいと郷里の先輩から言われ、病院に付設された高等看護学院に口利きしてもらい、第一回聴講生となった。聴講生の間は学校で授業を受けながら、国立病院で手伝いをしていた。当時、学校は女性ばかりで男性は一人しかいなかったのも、奇



写真11 負傷した人々が運ばれて来た松原駅

異の目で見られることもあった。

昭和二十四年に福岡の九州大学分校で第一回看護師国家試験を受けて、合格し、長崎県下で登録第一号になった。

参考文献

大村市立松原小学校編『私の知らない歴史』(大村市立松原小学校 刊行年不明)

記録 11

仁田 勝俊 生年月日 昭和二年七月二十五日 八六歳(終戦時 一八歳)

性別 男性

一、経歴について

仁田さんの実家は、萱瀬の農家で、戦時中父が町内会長、母が国防婦人会長をしていた。同郷の田中さん(6)の母も婦人会に入っていた。地主でもあったので、国のため多くの土地を提供し、軍や国策に協力していた。戦後は寺の責任者なども夫婦でしていた。仁田さんは八人兄弟(男二人女六人)だったが、当時は一〇人以上子どもがいる家庭は国から東条英機名で総理大臣賞の表彰を受けたが、町内に一軒だけ該当家族がいた。

母は町内の国防婦人会の人たちと芋まんじゅうを作り、小路口までリヤカーに積んで売りに行っていた。通勤する航空廠関係の工場で働く労働者が多かったたので、持って行ったまんじゅうが一つも残らないほどよく売っていた。ところが、後日町内会全員が警察に呼ばれ、「生活が苦しいのには同情するが、許可を取ってからの販売でない」と法としては認められない。」と厳しく注意を受けた。(母は)豪傑と有名な人だったので、警察にも相言い返したよ。うだが、その後は作って売りに行けなくなつた。当時は甘いものや酒がなく、とても貴重だった。酒もこの辺りの人は隠れて作り、持ち寄って飲んでた。母も爆弾が落ちてあいた穴を利用して、隠れて米の酒を造っていた。

二. 中学校、青年学校について

当時はほとんどの者が青年学校に行った。青年学校は萱瀬中学校内に建物があり、校長は中学校の者が兼任していた。兄が青年学校に通っていて中学校の事務や文章を書いたりする手伝いをしていたので、校長はよく自宅に来ていた。当時中学校に進学する者は少なく、(仁田さんは)小学校六年生の時に受験したが、同じ小学校の七八人の内、四人受験したところ、運よく一人合格することができた。

三. 小学校での様子と陸軍記念日、海軍記念日の行事について

小学校時に、習字で「欲しがりません勝つまでは」や「撃ちてしままん」という語を授業で書いていた。軍事郵便(手紙)も、外地(ビルマ、中国など)で戦う兵隊に宛てて書いた。書き方は先生から要点の指示があった。戦地から返信が届くこともあった。陸軍記念日、海軍記念日には今でいう運動会が開催され、近郊の小学校から四、五、六年生で足の速い生徒が選手として選ばれ、男四人女四人くらいが競技に参加していた。代表の選手に選ばれ、軍から迎えにきたトラックに乗って参加した。陸軍では閩兵分列という二〇〇〇人くらいが行進や匍匐前進し、想定した敵陣に空砲を撃つなど日頃の訓練を市民に見せる競技があった。海軍では、大村中学の五年生くらいのグライダー選手が四、五人代表でグライダー飛行を披露するプログラムがあった。競技に参加できるのは選ばれた生徒だけだったが、見に行くのは誰でもできた。

四. 徴兵検査について

徴兵検査は甲種合格、乙種合格があった。身長一五五センチ以下は乙種だった。結果はその日のうちに分かったが、終戦近くなると丙種であっても召集令状が来ていた。

五. 学徒動員について

霞ヶ浦航空隊に入隊する前、兵隊に行く者は第二十一海軍航空廠で一週間働いた。航空廠内でヤスリがけの作業を経験した。

六、予科練について

大村中学の三、四年時になると予科練の受験ができた。兄はビルマへ出征していたが、陸軍なので必ず生きて帰ると信じ、四年時に予科練を受験し、一四期生として七月十一日に入隊した。予科練への受験については、当時平出参謀が大村中学の講堂に来て特攻隊員を募集する話があり、担任も生徒に薦めていた。入隊試験はまず学科試験、その後諫早中学で県下一斉に体力テスト（適性検査）、そしてそれを通過した者が佐世保海兵団で体格検査を受けるようになっていた。試験で、駆け足の際の手の握り方を注意された（幼少時の指のケガにより折り曲げに不自由があつて、握り方が違っていたため）が合格し、霞ヶ浦航空隊に入隊が決まった。出発する日はまず朝早くから町内の人たちと一緒に氏神に参拝した時に出征挨拶をし、坂口（今の産直かやぜの辺り）で村の人に二度目の挨拶をして、最後は竹松駅で大村市内の親戚や同級生から見送られ、三度目の挨拶をした。皆の前で何回も挨拶をしなくてはいけなかったので大変だった。挨拶は「私はこの度予科練に合格いたしました。留守中は大変皆さまには家族がお世話になることでしょう。皆さんとくれぐれも元気で頑張ってください。私は今度会う時は白木の箱と申します。元気で行ってきます」と言った。

入隊する際に、日の丸たすきと大村中学の校長先生だった梅田倫平先生を始めとした皆で作ってくれた寄せ書きをたすきにして持って出発した。

七、霞ヶ浦航空隊での生活と終戦について

霞ヶ浦では、航空隊員になるための勉強はしたが、一度も飛行機に乗ったことはなかった。マルダイと呼ばれるいた飛行機（特攻兵器・桜花）は、飛翼の前部分が赤く塗ってあり、憲兵が常についていかなか見ることや触ることはできず、機密にされていた。

一度試験飛行があり、海軍大臣や当時の政治家や軍のトップクラスの人たちが多く集まった。日本で初めての一大行事であつたと思われ、天候により四日間も日にちが延びた。試験飛行をした人は当時日本で一番飛行時間が長い、

長野特務少尉だった。途中で落下傘がうまくひらかず落ちてケガをされた。試飛行の日は一日中見学するだけでなく、赤飯が食べられた。(仁田さんは)この時食事当番で赤飯を来賓に運んだ。航空隊では、勉強以外にも仕事ややることは多かった。

入隊してから飛行機が不足していることや生産が追いついていないことを知り、入隊前から戦局が厳しいのは知っていたが、「やっぱり本当だったか」と感じた。戦争の形勢が不利だと実感した。しかし、言えば捕まるので口でできなかった。周りの予科練の人も気づいていたようだった。

終戦になって、十月まで残務処理をしてから貨物列車に乗って帰った。「帰って合わせる顔がない」「嫌がられるのではないか」と思ったが、家族に会いたかったので帰ろうと思った。貨物列車には民間人も多く乗っていた。終戦になるまでは、「敵艦や基地を陥落するぞ」と意気込んでいたので、同じような気持ちで戦地に向かい亡くなった人のことを思うと残念でならなかった。生き残った者として毎年十月に長崎県知事主催で行われている慰霊祭への参拝は欠かさず、現在まで六八年間続けている。

八. 疎開工場について

戦後、帰ってきたところ一町七反の田んぼに八棟の工場が建っていた。郡工場と呼んでいたらしい。自宅には当時二階があり、工場の責任者である高橋中佐がいた。当時の椅子が残っていたが今はもうない。

九. 戦後の食糧難と工場の取壊しについて

戦後は食べ物がなく、塩なども量が決められており、かぼちゃばかりを食べていた。食事はわびしかった。

戦後になって財務局から連絡があり、土地は登記ではなく、軍に貸与していたので、八棟の工場は好きにしたいと指示がきた。何の補助金もなく、自分で壊さないといけなくなったので、五年計画で壊した。建物は田んぼに大きな杭が打ってあり、それを抜くのが大変だった。海軍で習ったとっくりきびり(巻き結び)で杭を折って解体した。萱瀬中学校の子どもが、学校の帰り道に野球の練習がてら、工場のガラスに石を投げて割って遊んだりして

いた。当時、皆裸足でガラスの破片が落ちてしていると怪我をしてしまうので、割られる度にガラスを必死に拾った。夜には、工場のトタン屋根を（持ち帰って売るため）剥ぎに来る者もいた。

10. 供出について

戦時中に金属供出をしていたため、帰ってきたら仏壇の仏具関係のものはすべて買い揃えなくてはいけなかった。食糧の供出は憲兵立会いで行われたが、主に実行長が各農家に供出量を割り当てていた。

11. 農地改革について

田を一反七〇〇円で買収する話があった。当時、宮代、田下に多くの土地を所有していたが、提示された価格があまりに安価であったので買収に反対するため、長崎県では四人の代表（島原市長、吾妻町長、諫早の地主、仁田さん）で首相官邸に一週間座り込みに行った。警察につかまれ、動かされるため、着ているものがボロボロになるので良い服は着て行けなかった。反対運動はしたが、最終的には買収に応じた。

12. 家での養蚕について

実家は萱瀬で一番の養蚕家だった。養蚕をするには広い桑畑が必要だった。部屋の中あちこちに蚕が置いてあり、機織場も自宅にあった。男性は餌用の葉っぱ取り、女性は蚕の糞の処理など手分けして作業していたので、両親は忙しく陸軍記念日や海軍記念日の運動会は見に来られなかった。当時竹松駅前に繭市場があり、絹を竹の籠に入れて天秤棒の前と後ろに二〇キログラムずつ吊るして運び、四〇キログラム出荷していた。予科練に行く時は絹糸で作った制服を



写真12 疎開工場跡地、川むこうにもあった。

着て行った。

■ 記録 12

神近 義光 生年月日 大正十四年八月十三日 八八歳(終戦時二〇歳)

性別 男性

一・経歴について

実家は竹松(大川田町)で、竹松尋常小学校を昭和十三年に卒業。当時は工業系の技術者が不足していたので、軍の命令で長崎と佐世保に工業学校が作られ、短期間で技術者の養成が行われていた。佐世保工業学校探鉱冶金学(つちまがね)科に入学し、昭和十七年三月に卒業。第二十一海軍航空廠の日字工場(にっごう)に軍の命令で昭和十六年十二月の在学中から勤務が始まり、設計員として入廠。初めは発動機部素材工場に配属された。日字工場は埋立てが悪く地盤が脆弱なため、使用不能となった。大村に移動することになり、昭和十四年頃から測量が始まり、十五年頃から古賀島町を中心に工場や施設の建設が始まった。昭和十六年から航空廠内各部の選抜された人材を臨時で集めた水陸施設係というグループが総務部の中につくられ、工場施設の設計や指示を行い、完成まで昼夜を問わず作業が続けられた。(神近さんも)水陸施設係の中の一人で設計に携わった(昭和十六年十月一日に開廠すると、水陸施設係は昭和十八年に解散)。大村の航空廠に昭和十七年に正式に就職してからは、実家から通勤した。

二・航空廠と戦時下の生活について

当時の航空廠は技術者約一万人、徴用工員約三万人、九州各地から動員された学徒(中学生、学業生)約一萬五千人を要する大規模な施設だった。それに付属する住居は工具宿舍が約一〇〇棟、家族持ちの工具用住宅が約二五〇〇棟だった。それだけ多くの航空廠関連の施設が建設されていたので、当時の大村の農家の人たちの協力は非常に大きかったと思う。

設計は多くの職種の中で一番上級。少尉以上と技師が高等官（少尉・中尉は二〇、二一歳くらいの若い人が多かった）。工長と技手は判任官、工手は判任官の一步前で、一等工員が班長に相当していた。

航空廠内では、車代わりに馬車が使用され、馬が多く作業していた。

戦争が拡大するにつれ、金属類は供出され、食糧は配給制になり、一般家庭は生活用品の不足が目立っていたが、軍関係には支給されていた。航空廠内での食事は、特に不自由せず、昼食は弁当ではなく食堂で麦飯や白米を食べていた。食堂は高等官、判任官など階級によって分かれていた。航空廠の工員と工員の家族しか利用できない物資部という売店が各地にあり、何でも手に入ったので、不自由のない生活をしていった。

三 十月二十五日の空襲について

二十五日、朝十時くらいに警戒警報が鳴り、それから五分と経たないうちに空襲警報が発令された。その時、一人て本部の二階の屋根の上に作られた見張所にいたので、高度八〇〇〇か九〇〇〇という地上砲が届かない高さで西彼杵半島方向から飛来するキラキラと輝くB29の機影が見えた。慌てて建物の外に出て、担当していた素材工場へ走った。工場に着くか着かないかのところで、ガラガラガラという不気味な音と同時に二五〇キロ爆弾の破裂音、地響きがし、焼夷弾が入り乱れて落下してきた。すぐに消火にかかったが手の施しようがなく、続けざまに落下する爆弾の爆破音と爆風の強さは言い表しようがなかった。B29編隊の波状攻撃は凄まじく、皆とただ自分の身を守るしかできなかった。空襲のひどさに呆然とする中で、空襲警報・警戒警報解除のサイレンが鳴ったので、周囲を見回すと見事に立ち並んでいた工場の建造物は爆弾で鉄骨むきだしになったり、燃えていたりで、僅か二時間の爆撃で航空廠は壊滅に近い大被害を受け、大惨事となった。

二五〇キロ爆弾が落下したところには大きな穴があき、馬がその中で死んでいた。空襲でやられた人たちの亡骸を見た時、あまりにも無残な状態だったので、ただ言葉を失うばかりだった。大勢の亡骸を木工場で作った棺の中に収容し茶毘にふした。その後、本部で爆弾が落ちた位置を調べて、被害報告の図を作成した。若くして亡くなっ

た仲間たちのことを考えると残念でならなかった。

技術者としての誇りを持ち、東洋一の大航空廠で世界に誇る飛行機の製造に携わった者の一人として九〇年近く生きてきたが、当日のことは今でも時々夢に見るほど忘れることができない。あの衝撃はうまく言葉にできない。

四・航空廠での仕事について

航空廠では水陸係解散後は発動機の素材部におり、調質工場から送られてきた発動機部材を素材工場本部で調整し、素材を硬度試験することが任務であった。試験と研究が仕事の大半を占めており、発動機部にはただ一人しかいない職種だった。当時金属学はドイツが世界一の水準で、日本は二〇年遅れているという認識だった。日本とドイツは協力関係にあったので、ドイツ語の本を購入し勉強した。外国製の高精度のビツカーズやブリネルといった機械を使っていた。

五・鹿島の工場について

空襲後はすぐに佐賀県鹿島へ行き、酒造場（当時大村には酒造場はなかったが、鹿島にはあり、蔵が広く天井の高い建物だったので工場として直ちに使用できた）で部品素材の製作に入り、他に寺（本部は誕生院）を利用して工具宿舎にした。約二〇〇〇人の工具が移動し、急ごしらえの中、作業をした。機械は嬉野経由でトラックで何回にも分けて運んだ。作った部品はトラックで大村の発動機部へ運ばなければならなかった。地区の国防婦人会から炊き出しをしてもらったり、非常に工場に協力的であったことが有難かった。

六・原子爆弾の投下と終戦について

投下時は鹿島にいたので詳細は知らないが、軍関係機関にはすぐに報告がきた。「特殊爆弾」と聞いた。終戦を告



写真13 第二十一海軍航空廠本部

（河野忠博ほか編『ふるさとの思い出写真集明治大正昭和』 国書刊行会、1980年 から）

げる正午の玉音放送は聞かず、当日はずっと作業をしていた。終戦は報告で知り、最初は「嘘だ」と思った。

廠長命令で各地の疎開工場に運んだ機械はすぐに大村に集められた。本部にあった設計図や地図、工員名簿は米軍の進駐前に全て燃やした。重要な書類には「軍極秘」の印を押して管理していた。十月二十日頃に米軍一〇〇名程が竹松航空隊から進駐してきたので、本部で米軍の立会いをした。本部の建物は空襲被害を受けていなかったの
で、米軍はそこで寝泊りし、大村地区の軍の処理と長崎原爆の調査をしていたようだった。

しばらくすると、(米軍の)人数が多くなってきたので第四十六連隊の駐屯地(現在の陸上自衛隊駐屯地)に移った。残務処理では、航空廠の機械を二〇、三〇人で梱包し、箱に送先を台湾の基隆港と書き込み、船で送った。「賠償物資」⁹だと聞いたような気がするがはっきりは分からない。戦後、台湾に行った時には、それを確認できなかった。残務処理には一年近くかかった。

七. 慰霊祭について

昭和三十年から有志によりささやかな供養がされるようになり、昭和三十六年第一回目の慰霊祭を開始した。昭和三十八年六月現在の慰霊塔が完成し、第三回目に奉賛会が結成された。その後、全国の航空廠関係者に呼びかけを始め、慰霊祭の開催日を毎年十月二十五日に決定した。昭和五十六年第二〇回から海上自衛隊大村航空基地隊のラッパ隊の演奏で国旗と軍艦旗の掲揚を行い、参加者が多い時は七〇〇名に達した。平成十年第三六回から第二十二航空群の協力を得て盛大な式典を挙行するようになり、以降第五一回まで奉賛会を中心に挙行したが、奉賛会の高齢化が顕著になった。平成二十五年度に幸いにして、第二十二航空群の元司令であった島信行さんの御厚意により自衛隊のOB会で慰霊の会が結成され、例年どおりの慰霊祭を挙行してもらうようになった。

参考文献

第二十一海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会編『放虎原は語る』(大村市 一九九九)

松下 貞義 生年月日 大正六年三月一九日 九六歳(終戦時二八歳)

性別 男性

一・経歴について

実家は福重の農家。高等小学校、福重青年学校を卒業後、二〇歳で徴兵検査に現役合格し、昭和十二年十二月一日に東京の赤坂一ツ木町にあった近衛歩兵第三連隊第十中隊に入営した。当時近衛歩兵に配属されるには、憲兵隊が近親者等をよく調べて問題ない者が合格になった。その時大村では三人合格者がいた。

昭和十三年四月一日から十四年三月三十一日までは、近衛歩兵第三連隊に所属して支那事変(当時そう呼んでいた)に参加した。当時は前線で兵が足りなくなると補充されることがよくあった。昭和十五年一月九日からは近衛混成旅団の補充員として近衛歩兵第一連隊に配属され、賓陽(ひんよう)作戦に参加した功労で勲八等白色桐葉章を授与された。昭和十六年一月三日に帰国、予備役になり、それからしばらくは実家で農業をした。

昭和十六年十月二十六日に召集がかかり、大村部隊に入隊。十一月十五日の夜軍用列車に乗り、出征した。見送りは誰もいなかった。門司に到着し、本土で過ごす最後の夜を楽しみにしていたところ、所属していた第二分隊は軍旗衛兵に服務するように命令があった。皆残念だったはずだが、愚痴一つこぼさず服務する姿に「戦場においても期待できる兵隊ばかりだ」と嬉しく思った。翌日御用船に乗り、南洋群島へ派遣され、それからは敵前上陸戦闘や訓練に明け暮れた。

二・太平洋戦争開始時期の戦闘について

アメリカとの戦争が始まると、更に南方へ移動した。船団は敵の爆撃機数機から爆撃を受けたので応戦したが弾丸は届かず、船団はジグザク航行で爆弾を避けながら進み、一月九日夜にタラカン島(インドネシア)に停泊した。(松下さんが)所属する第二分隊は先兵として、中隊配属の通訳から海岸にトーチカがあると告げられた砂浜を何(キロメ)

も進んだ。海中から海浜まで張り巡らされた鉄条網を見つけると石工出身の器用な上等兵に破壊を命じ、匍匐はくかくして進むと灯火しているトーチカを発見した。小隊長の命令で突っ込み、寝ていた敵兵（オランダ兵）三人を捕虜にした。オランダ兵は「日本人は夜も戦争をするから野蠻だ」と言ったそうだ。この功勞で勲七等の瑞宝章を授与された。翌日タラカン油田の東方に進出すると、油田から黒い煙と火柱があがっていた。次々と油タンクに引火する様子は言語に絶するものがあった。十一日に敵降伏の情報が入り、戦闘は終了した。

その後は、ボルネオ島（インドネシア）のバリックパパン（バリックパパン）、バンジュールマシン（バンジャルマシン）に進攻し、カンダンガンの警備に当たった。カンダンガンでは警備隊は非常の場合を顧慮して現地人の自動車運転手を雇い、隊員の中には自動車の整備士もいたので、ほったらかしにされていた自動車を集め整備し、動けるようにした。警備勤務の間隙を利用して分隊全員が運転の練習をし、オートバイも乗りこなせるようになった。警備以外の時間では、現地で押収したカメラで写真を撮ったりした。

三、手紙と慰問袋について

当時、戦地で手紙を送る時と受け取る時には検閲で中を確認されていた。手紙にいつ、どこで書いたかを書いてはならなかった。（書いた時期がそれとなくわかるように）文中で季節の話を入れるなどして、なるべく検閲にひっつかからないようにした。慰問袋は二種類に分類でき、家族から送られてくるものと不特定多数の子供から送られてくるものがあった。中には手紙の他、缶に入ったビスケット、コンペイトウ、キャラメル、菓、芸能人の写真などが入っていた。賓陽（中国）では、いつ誰から手紙や慰問袋が届いたか、また自分がいつ誰に手紙を書いたかを手帳に詳細に記録していた（表形式とし、青が慰問袋、赤が封書、上段が自分で送ったもの、下段が届いたもので区別した）（写真14）。手紙は支那事変の頃は届いていたようだが、ビルマ（ミャンマー）の頃はほとんど輸送船が沈められてしまっていたので届いていなかったと思う。

四、戦場での経験について

重機関銃には五発に一つの割合で曳光弾えいこうだんが入っていて、それを撃つ時はとても綺麗だった。

敵の飛行場を夜襲した時、腰のベルトに付けていた弾倉（牛皮製）に当たって止まり、体に当たらずに済んだ。通常一つの弾倉の中には三〇発の弾を入れていたが、穴が開いて全て落ちてしまっていた。「よく（弾が）暴発しなかった、腹に千人針を巻いていたおかげだ」と思った。

雲南省（中国）で、遮放しやほうに駐屯し警備に当たっていたところ、敵の戦闘機が機銃掃射してきたので、皆で軽機関銃二丁と小銃二〇丁くらいで一機を一斉に射撃したところ命中し、（敵機が）バイン畑に墜落した。

インパール作戦始動時にメイミョウ（ミャンマーのピンウーリン）で行われた第十五軍の師団対抗の射撃大会では優勝した。牟田口軍司令官から賞品として一箱二〇本入りの「マスコット」という煙草二〇〇個と固形石鹼二〇〇個をもらったので、皆に分けてあげた。優勝する前の晩には富士山に日の丸の旗が立っている夢を見ていた。予知夢だったのか、今でも不思議で覚えている。

射撃が得意だったので、戦地では鳩を撃ち、一発で二羽同時に当てたりもして、たくさん捕まえて食糧にしたことがあった。

中隊から射撃が上手な三人が代表で出場したが、後に三人全員が戦闘中のケガで右目が見えなくなった。不思議だが、多くの人を殺した罰だろうかと思った。



写真14 手紙のやりとりを記録した手帳の一部
【註】 松下寅市さんは貞義さんの父

（個人蔵）

戦闘続きでいつ死ぬか分からないので、(戦闘前に)明日は死ぬかもしれないと思った時は水盃みずさきを交わしていた。戦死したら戦友には、骨や小指を持って帰ってもらおうとお互いに約束していた。

戦地ではあまり家のことは思い出さなかった。スコールに打たれながら天幕にくるまって寝る時や野営の時に、ふと「母にもう一度会いたい」「家の畳でもう一度寝たい」と思ったことはある。

戦場では先兵を務めることが多く、もし戦争に勝っていたら、勲章はもつと貰っていたと思う。それだけ激しく大きな戦闘にいくつも参加した。

五・戦地での負傷について

出征時は第一中隊第一小隊二分隊の分隊長をしていたが、騰越とうえつイ号作戦後は指揮班に属し兵器係をした。

昭和十九年八月三十日、放馬橋ほうまの戦闘(中国)で、手榴弾の破片で右上腕と左肩甲骨を負傷した。更に敵と接近した相撃ちで敵弾が(松下さんの)小銃(三八式歩兵銃)の上帯の三環さんかんに当たり、破裂した弾の破片で右目と頭部の十数カ所に怪我をした(今も破片は入ったまま)。目が飛び出たように感じ、とつさに手で押さえたが、既に目は見えなくなっていた。すぐに壕に寝かせてもらい、衛生兵から注射をされ、衛生兵が「小鼻から破片が入っているので、(命は)もう難しいかもしれない」と中隊長に報告しているのが聞こえた。その時はいよいよ「天皇陛下万歳」を言わなくてはならないかもしれないと思った(事実、最後にそう言っただけで死んでいく人もいた)。

メイミヨウの病院では、空襲のため昼間はほとんど山へ避難していた。山ではコンニャク芋を掘り、持ち帰って先輩からコンニャクの製法を教わり、作っては空腹を満たしていた。病院の備品の洗面器を鍋の代用に使っていたら、看護婦看護師から怒られた。病院にいた間は「中隊から離れたくない。こんな所では誰も骨を拾ってくれる人がいない。早く中隊に復帰したい」と思っていた。戦地で仲間が亡くなると、初めのうちは小指を切って三角巾に包んでいたが、転進が始まってから遺体収容はほとんどできなかった。

六、転進とピラについて

三カ月でラングリーン（ミャンマーのヤンゴン）の病院を退院し、ラシオへ行った。一日も早く中隊に戻ろうとしたが既に出発した後だったので、その教育隊で食糧物資の糧秣係りょうまけいをした。その後、教育隊で小隊を編成し（小隊は全く面識のない者ばかりだった）、ワンチンの五十六師団野砲隊の転進援護を命じられた。野砲隊はたかき山付近の道路に布陣しており、小隊はその山に潜伏した。敵兵が夜明けと同時に「バンサイ」と大声を出しながら旗を振ってラツパを吹きながら野砲隊に突撃を始めた。蜘蛛の子のように何百という敵兵が突撃してくるのに野砲隊は零距离射撃りしやうで応戦した。敵兵は撃たれても撃たれても突撃を続け、遺体は山のように重なり、中には味方の遺体を盾にして進む者もいたが、砲撃はすさまじく、野砲隊の勝利に終わった。

そんな中、背後の山にアメリカ兵らしい敵兵がいたので、撃ってみようとしたが、左目だけでは照準がうまくいかず、射撃できなかつた。小隊が山に潜伏していることがばれて、敵から迫撃砲の集中弾を受けた。そこで急遽山を下り、ワンチン川を強行突破することになった。小隊より五〇メートルほど前を斥候せつこう（敵状・地形等の状況を偵察・捜索させるため部隊から派遣する少数の兵士）として兵隊一人を連れ、弾が飛び交う中、川の壁に沿って前進すると途中で川の上の敵兵と顔を合わせてしまった。すると頭の上で大きな声がして後方の小隊にチェコ機銃の射撃が始まったので、手榴弾を投げ、急いで川の左岸を進み、土手に這い上がって茂った葦の中に身を隠した。近くに第八中隊のトーチカがあったので、中に入った。外の様子をうかがっていると、敵兵は午前中をかけて友軍（味方の軍隊）の遺体収容をしていた。空には偵察機がぐるぐる回っていた。

夜になってから教育隊に帰隊すると（松下さんの）戦死報告がされており、私物品はきれいに整理されていた。事実、昨日の激戦で小隊のほとんどが戦死していた。

昭和二十年二月頃ナンバツカ付近でようやく中隊に復帰した。その後遭遇戦を経てきたが左目ではどうにもならず、ただただ撃つより他に方法はなかつた。全くもって慚愧の念に堪えなかつた。



ミャンマー周辺地図

ビルマで転進が始まってから、米軍が降伏を呼びかけるビラを頻繁に撒くようになった。「悪くはしない」「手をあげて出て来なさい」などという内容だった。初めはデタラメだと信じていなかった。補給路を断たれて物資がなくなり、こちらが一発撃てば一〇〇発撃ち返してくるような負け戦が続き、「戦争はもう終わります」「東京も広島も焼けました」と書かれているビラを「もしかしたら本当かも」と少し信じるようになった。

同時期、日本はマツチ箱ぐらいの大きさですごく威力のある爆弾を作っているという噂があった。だから「戦争には勝つぞ」と信じていた。

七. 終戦後と帰国について

終戦はマアクマイ(マークマイ)で軍司令部から無線が入って知った。終戦の勅語を聞いた時は「やっぱりな」と思った。憤慨し泣き崩れる者や命を絶つものもいなかった。昭和二十年三月に昇進し、終戦時は陸軍曹長になっていた。

終戦後、軍隊は現地停止の命令が出た。小銃(三八式歩兵銃)の菊の御紋はヤスリで消すように言われたので、すぐに皆で小銃の薬室の上に付いていた御紋をヤスリで削った。御紋は天皇の象徴、天皇の品物という認識だったので、敵に渡したり、取られてはいけないという判断だったのでないかと思う。現地停止という命令はあったが、敵に捕まれば、インドの捕虜收容所に戦犯として連行されるという話があり、捕虜にされる(と考えられていた)のも嫌だったので、部隊長の提案でタイへ行こうということになった。一ヵ月後に到着した。到着後、武器は全てきれいに磨いてタイで武装解除した。それからいくつかの部隊が集まって畑や井戸掘りをして、野菜を作るなどして自活生活をしながら約八ヵ月滞在した。滞在の代償に、タイ政府から言われて道路建設の手伝いもした。

昭和二十一年五月十六日にバンコクから日本の小さな駆逐艦に乗って帰国した。船の中で持ち物はほとんど没収され、一〇円しか日本へ持ち込めなかった。戦地では軍票や郵便貯蓄もしていたが、終戦ですべて無駄になった。

神奈川県横須賀市浦賀に到着し、その後千葉国立病院(国発行の履歴書には浦賀病院となっているが違うと思う)

に三日間入院し、退院してから大村へ戻ってきた。

戦地で連隊長の副官をしていた田添さんが、(戦時中、先に)帰国した時に(松下さんが)現地で撮った写真を両親に届けてくれていた。(両親は)「戦死したのではないか」と思っていたが、田添さんから電話で元気な様子を聞いていたので、「(生きていると)信じて待っていた」と言われた。

実家は田畑が荒れていた。実家付近に落ちた爆弾で大きな穴が空いているところもあり、焼かれた家も二、三軒あった。進駐軍はもういなかった。帰国後は食糧不足で、すぐに増産をしなくてはならなかった。

八・恩給、傷痍軍人会について

中隊三〇〇名の内一五九名は亡くなり一四一名が生きて帰ってきたが、ほとんどが戦地で怪我をしていた。怪我をしなかったのは一名だけだった。帰国してから、靖国神社付近で傷痍軍人が寄付を募っているのを見た。「可哀相だが、生活していく上では仕方ないことなのだろう」と感じた。そういうことが社会問題にもなり、昭和二十八年くらいから傷痍軍人に軍人恩給が支給されるようになった。同時期に大村傷痍軍人会が設立されたと思う。設立当時は一五〇名の会員がおり、年に一回の総会があり、市からの補助も貰いながら運営していた。

帰国後は、近衛兵の経験をいかして宮城(皇居)の護衛の仕事に就きたいと思っていたが、目の怪我をしていたこともあり、実現できなかったのが残念だった。また、傷痍軍人ということではなかなか結婚が決まらず困った。実家の農業を頑張り、嫁に来てもらえるようになった。

平成二十六年二月時点では傷痍軍人に該当する人は大村に八人しかおらず、(松下さんは)第五項症に当たり、傷痍軍人の該当者には戦傷者急行引換証が支給されている。財団法人日本傷痍軍人会は平成二十五年に六〇周年を迎え、十月の最後の総会に天皇后両陛下をお招きし、御言葉を賜り、解散式が行われた。その他、大村には第一中隊戦友会、ビルマ会、軍人会福重支部があり、会長を務めた。軍恩会は県が取り仕切り、当時一〇〇くらいの支部があったが、平成二十三年に県とともに大村の各会も解散した。

戦争で片目を失い、傷痍軍人になったことで残念な思いをしたこともあったが、目の怪我をしたので命が助かったと思う。今考えると、敵でも味方でも残された遺族の悲しみを思えば、多くの人を殺さなくて良かったと思う。亡き戦友の御冥福と平和を祈るばかりである。絶対に戦争をしてはならない。

参考文献

歩一四六戦友会聯隊誌編集委員会編「想い出」(歩一四六戦友会 一九八九)

■記録14

玉利 タツノ 生年月日 大正九年八月七日 九三歳(終戦時二五歳)

性別 女性

一、経歴について

佐賀県武雄市出身。高等科を出るまで料理もしたことがなかった(料理や家事は母がしてくれていた)。高等科の三年の時、何もせずに家にいると徴用にとられると造船所で働いていた従姉妹から聞き、強制的にしかもどこにやられるかも分からないのは嫌だったので、ちょうど航空機部の募集があり筆記試験のようなものを受けて、昭和十五年末に佐世保立神の航空機部に入った。

ご主人は、鹿児島出身。高等科を出た後、しばらくは親戚でしていた竹細工の仕事をしていたが、北九州の八幡鉄工所で働き、その後佐世保の発動機部(後の航空機部)で働き始めた。航空機部が立神から佐世保日宇工場に移り、日宇の木工所が焼けて(ご主人は)第二十一海軍航空廠機械部へ配属された。最初の三カ月は列車で通勤した。立神から日宇に工場が移った二一歳の時に、仕事を辞めて、昭和十七年頃ご主人と結婚。佐世保崎辺にも工場があったので、大村に行かない者は行くような話もあったが、行かなかった。

二 大村での生活について

ご主人が大村に来た時は、ちょうど池田工員住宅ができた頃だった。

自宅（諏訪八区）の旧家屋は、当時一番最初にモデルのような形で建てられた工員住宅で、ご主人は選出されて見学に行ったと聞いている。ご主人は佐世保に来てすぐに二一歳で伍長に昇進し、半年して旋盤の組長になった。大村に来てからは池田工員住宅一階で暮らしたが、（タツノさんは）一カ月の半分は、佐賀県大町の姉のところに行っていた。姉からは物をよくもらい、あまり不自由しなかった。当時は肥前山口まで出れば、有明海を通じて物が手に入っていた。子供の服のおさがりももらっていた。ご主人は航空廠で組長をしていて、五島から来た二〇人の工員を受け持っていた。仕事が忙しく帰らないこともあったが、昼と夜の食事は航空廠で出ていたので心配なかった。

大町へは大村駅で切符を買い、列車で通っていた。切符を買うのに並んだことはなく、いつもすぐ買った。列車は一等〜三等席があり、二等席を利用してはいた。三等席はとても混んでいた。

魚の配給はいつもエイを切ったものが配給されていた。米の配給は少しだけあった。切符を使ったのは、戦後からでは。

防火訓練は、二、三回あり池田の山の方に避難して隠れたことがあったが、空襲にあった経験はない。池田の山にはその時防空壕はなかったが、後から作られたと聞いている。ご主人は池田で防災組長をしていたので、警報が鳴れば帰ってきていた。十九年の十月二十五日の大空襲の時は、（タツノさんは）武雄のくunchで大村にいなかった。大村がやられたと聞いて翌日戻ったが、ご主人は無事だった。工員で亡くなった人もいたので、ご主人はお葬式など



写真15 池田工員住宅

（河野忠博ほか編『ふるさとの想い出写真集明治大正昭和』 国書刊行会、1980年 から）

でしばらく家にいなかった。池田工員住宅や近隣では、空襲で亡くなったとか、戦死したとかはほとんど聞いたことがない。

三. 上波佐見への工場移転と生活について

航空廠が空襲を受けて機械部は上波佐見へ移転となり、昭和二十年の初めにご主人と転居。上波佐見は金山を掘った際の大きな穴があり、そこに工場が移された。波佐見の焼き物関係の大きなお宅のお座敷を借りて生活した。大家さんはおばあさん、娘夫婦、孫夫婦で暮らしていた。小麦の一〜二斗の配給があつたが、あまり食べなかつたので半分以上大家さんにあげていた。それを使って大家さんのおばあさんがまんじゅうを作つて売っていた。配給された分の少しのお米はとっておき、毎日麦の混ざりものではない白米を食べていた。当時から甘い物が好きなので、お菓子類は姉からもらい、欠かしたことはなかつた。

四. ご主人の出征について

ご主人は徴兵検査では甲種合格しており、昭和十九年に一度召集がかかり熊本に配属され入隊したが、海軍の中尉クラスの人が「この人はこちらの職場にいないと駄目だ」という理由で身元を引き受けに行き、翌日に帰つてきた。昭和二十年三月に二回目の召集がかかつた。召集令状は航空廠の方へ通知がいったと思う。(タツノさんは)召集をご主人から聞いた。数日も置かず出征しなくてはいけなかつたので、町内を回つて千人針を作り持たせたが、特別見送りはしなかつた。判任官(判任官から昇進すれば高等官)にあと半年でなれるという時で、ご主人は惜しがつていたと思う。前日もすぐに帰つてきたので、今回も帰つてくるだろうと思つていた。ご主人の出征を悲しいとか思わず、兵隊に行くことは国民の義務だと思つていたし、生来のん気だったのであまり取り乱すことはなかつた。出征後、また海軍から身元を引き受けに行つたようだが、今回は秘密部隊なので中尉が行つても駄目だつたと、別の組長さんが伝えに来てくれた。入隊から二、三ヵ月後、「鹿兒島の川辺にいる」と手紙がきたので、昭和二十年四月、五月の二ヵ月間は鹿兒島のご主人の実家にいた。ご主人は兵舎だったが日曜日は面会できたので通つた。鹿兒島で

は四機編成の米軍の航空機が何百機も飛んでいるのを見た。(その後)「川辺にはもういないので、何かあった時のため帰るように」とのことづけがあったので、翌日には上波佐見に帰ってきた。五、六月くらいだった。

五・原子爆弾の投下について

原爆が投下された日は、(上波佐見で)朝から各班に分かれて松ヤニを取りに行っていた。昼食時に小高い丘の上に行ったところ、ドーンという爆音の後、黒い煙があがってキノコのような形になり、その後黄色くなった。爆風はなく、揺れもなかった。「何だったのだろう」と思ったが、近くにいたおじさんが「新爆弾ができたらしいから、それかもしれない」といつていた。被爆者は見なかったが、「ひどくケガをした人が列車に乗っているらしい」と人から聞いた。

六・終戦について

終戦のラジオは大家さんの家族と一緒に聞いた。「負けたのか」と思ったが、周りで特別騒いでいるような人もなく、十五日は平凡で静かなものだった。「進駐軍が来て、何かあったら山へ逃げるように」と言われていたが、誰も行かなかった。ご主人は十月に帰ってきた。戦後、航空廠から米一俵三〇_{キログラム}をもらってきたが、鹿児島に帰ることになっていたので、義兄(大町にいる姉の夫)と大家さんにあげた。

七・戦後工員住宅に入るまでの経緯について

終戦後はご主人の実家のある鹿児島へ帰ったが、一年半くらいで大村に戻ってきた。諏訪八区の二階を借りて住んだ。当時は二家族が住んでいた。七区に一度家を買ったが、更にその後、現在の場所にあった住宅が空いたので、住宅組合長さんから入らないかと話があり、昭和三十六年くらいに入った。入るにはそういう紹介が必要だったと思う。当時は板間と三部屋があり、三畳、六畳、四畳半のつくりでお風呂はなく、二階も使っていた。

購入したのは今から約五〇年前。それまでは増築や改修は、財務局に写真を添えて申請して行っていた。この辺り一帯では一番最後の購入で、財務局から「今後は貸すことはなく、最後の機会だから買いませんか」という話があつ

た。購入して現在の形に建て替えて二五年くらいになる。

八・衣服について

立神に入った頃からもんぺをはくようになったが、それまではスカートだった。もんぺを自分で作ったことがあり、緋あざで作ったものをはいていた。

■記録15

楠本 勝義 生年月日 昭和三年十二月十八日 八五歳(終戦時一七歳)

性別 男性

楠本 輝子 生年月日 昭和九年四月二十日 七九歳(終戦時一一歳)

性別 女性 関係 夫婦

一・経歴について

(勝義さん)父はもともと西大村で久留米の造り酒屋の支店で働いていたがうまくいかなかったため、本店のある久留米へ移ったがそこも駄目になった。その後、満州に出稼ぎに行きハルピンでアイスケーキ(現在のアイスクリーム)の商売をし、成功していたところ、召集令状がきて帰国。支那事変(当時そう呼んでいた)に三年出兵した。その後、第二十一海軍航空廠の事務官にならないかという話もあったが、再度満州の鞍山製鉄所にクレーンの運転手として出稼ぎに出た。その時、諫早駅まで父の布団をリヤカーで運んだのを覚えている。父は昭和十八年に四〇歳で亡くなったと叔父から聞いた。その後、祖父母の家に預けられ、鈴田尋常高等小学校の高等科二年間はほとんど学校に行けなかった。当時同じ集落の人から、旧制大村小学校の前に日の丸屋という本屋があり、そこに奉公に行けば本が読めると薦められたこともあったが、六人兄弟で長男だったので、同じ集落の農家に奉公に出された。

(輝子さん)昭和十七年小学校二年生の時に、佐世保から転校。父は航空廠で飛行機部の工場長を務め、水田一区の官舎(現在の向陽高校の横)に住んでいた。官舎は大通りを挟んで甲(六畳・八畳・三畳・風呂付き)の二軒続きの長屋・乙の区別があり、甲に住んでいた。班が七つあり、甲は一〜三班、乙は四〜七班で、一班は一二軒ほどだった。恐らく八〇軒以上の官舎があった。

二. 青年学校の様子について

(勝義さん)鈴田青年学校は五年制で国民学校と同じ敷地内にあり、草色(現在の自衛隊の制服のようなカーキ色)の制服を着て、地下足袋を履いて週に二日通った。一日は午前中が本科(小学校の学習内容と大差がなかった)、午後が軍事教練。あと一日は午後からの軍事教練のみだった。一学年は一〇名程度。入学には試験はなく、手続きのみ。青年学校に行くのは、当時義務の認識で高等小学校を出た農家の人ばかり来ていた。(勝義さんは)上の級のの人たちと一緒に入学した。

軍事教練は、中間除隊や兵役を満期で終えた人が教官で来ており、一・二年は木銃、三年生から鉄砲を抱えた。匍匐前進の練習をし、上級生が模擬戦をしているのを見たりした(五年生は徴兵検査で戦争に行く人が多く、あまりいなかった)。筵を巻いて作った藁人形を突く教練があり、上級生は銃剣で刺していた。(勝義さん)は突く時の姿勢が良いので、皆の前で手本としてやらされたことがある。伝令をしたこともある。

「行軍」訓練があり、地下足袋を履き、食糧を風呂敷で背負い、二年生の時に二泊三日で雲仙を越えて島原まで行軍した。上級生は背嚢を背負っていた。小浜で一泊し、雲仙から島原まで歩くのが大変だった。島原の旅館でも泊まった。夕食に天ぷらが出て朝食と昼の弁当にも入っていたが、諫早で弁当を食べたら何人も腹痛になって大変だった。「耐寒行軍」というものもあり、鈴田から五家原岳まで登って金泉寺に下りて萱瀬に出て大村駅に行った。行軍の後は地下足袋の底が紙のように感じた。

学校に行っていない時は家の手伝い、農業をしていたが、仕事が大変だった。青年学校に行くのが楽しみだった

三. 徴兵検査について

た。
(勝義さん) 五年生は徴兵検査の年齢なので、受ける人が多かった。十二月生まれの人だけ一年遅く年下の人と検査を受けた。

四. 徴用・動員について

(勝義さん) 青年学校の時、二カ年、南方へ徴用に行くように呼びかけがあったが、長男で両親がなく、兄弟がいなので祖母に断るよう言われ、職業安定所(大上戸川橋のそば)に断りに行ったところ、認められて行かなくてすんだ。他の人が行くより遅れて一番最後に行ったので、募集人員が足りていたのかもしれない。通常は徴用がかかったら行くのが普通だった。集落の先輩には炭鉞へ徴用に行った人もいた。

町内会で戦闘機を爆風から守るための壕作りの奉仕に行った。鈴田から与崎まで歩き、そこからは大きな木造のどんべ船(団平船)に乗り、大村の航空隊のところに着いた(船着き場がどこであったかは覚えていない)。藁の吹(筵かきで作った袋)いっぱい畑の泥を三〇キログラム以上入れて、戦闘機が隠れる高さまで積み、U字型の土壁のような壕(屋根はない)を畑の中に作った。作業は町内会から呼びかけがあり、交代で二回程行った。年齢関係なくお年寄りも作業していた。

五. 農家以外の仕事について

(勝義さん) 昭和十七、八年くらいに海軍病院の南病棟の建設の仕事に行くと、北病棟は既にできていたので、金子組(南病棟を)建設している現場だった。そこには農家の人が暇な時に働きに來ていた。瓦運びやトラックに建築資材の積み下ろし等をしたが、トラックの荷台に乗るのが楽しみだった。病院では、患者である軍人が広場でゲートボールをしていた。

道路工事の仕事に先輩と行った。三人一組でトロッコを使い、泥を運んだ。現場には諫早・鈴田から働きに

来ている人たち男女一緒にトラックに乗せられてきていた。

これらの仕事で賃金は、いくらもらったかは分からない。奉公先では、(直接自分でもらわないが)一年間働いて四〇円の賃金だと近所の人から聞いた。近所に菓種を借りに行った際、その家のおじさんから海軍記念日へ行くと言ったらおこづかいをもらったことがあった。

六、疎開や空襲について

(勝義さん)当時竹松の辻、九郎丸に叔母がおり、叔母家族が鈴田に疎開するので、疎開に必要な荷物を取りに行つた夜に、その家で空襲にあった。当時は鈴田に疎開して来た人は十何組もあり、多かつた。

庭先の防空壕に入ったが米軍が照明弾を落とす、壕内が赤くなつたのを覚えているが、その時は大きな被害はなかつた。その頃、周辺の郡川付近には草薙部隊の三角兵舎がたくさんあった。翌日、(鈴田の家から借りた)牛で荷物を運んでいたところ、古町で再度空襲にあい、荷物は放り投げて牛を連れて富松神社の防空壕に行つたが、牛は中に入れられなかつた。

十月二十五日の空襲の時は警報で知り、おさまつた後、小川内にある鬼の石に登りだけの被害かを見た。箕島には当時高射砲台があつたが、いつも届かず弾が下の方で爆発していた。B29が向かってくる時には撃たず、Uターンして帰る時にばかり撃っていた。来る時だと見つかつて、やられるからだろうと言っていた。

小川内の辻から特攻機が飛んで行くのを数回見た。航空隊の上を旋回して飛んで行くので特攻機だろうと農家の人が言っていた。

一度落下傘が小川内の山に降りてきたことがあり、米軍機と思つて集落の大人が鎌を持って探しに行つたら日本人だつたということがあつた。

沖繩が負けてから終戦近くには、ロッキード製の胴体が二つつながっている戦闘機が飛んで来ていた。航空母艦か何かから飛んで来ていたのでは。

小川内では谷間だったので空襲を受けたことはなく、日中仕事中に警報が鳴っても逃げずに飛行機を見ていることが多かった。

(輝子さん) 水田一区には一二軒で一班という区切りで班があり、一班に一つ防空壕があったが中が狭く、警報が鳴って入っても嫌になって家に帰っていた。親からは怒られていた。

七. 当時の食生活について

(勝義さん) 食べ物は農家だったので、米は供出していたが食べられた。半分は麦が混ざっていた。三、四杯食べていたが、奉公先なので遠慮していた。魚は鯨を食べていた。

早朝、闇芋を牛にのせて上小路のお宅まで届け(売り)に行っていた。大村の町から着物と食べ物を交換しに来た人もいた。

奉公先の家に直接食べ物を買って来た人から、帰り見つからないように帰るにはどうしたらいいかと聞かれたので、人目につかない道を案内してあげたことがあった。

(輝子さん) 食べ物は配給されたものでは足りず、母は着物を交換に行っていた。粟粉のようなもので作っただんごが入った汁や麦に芋(さつまいも)を入れて炊いたものを食べていた。炒った大豆が配給されていた。

八. 防空壕について

(勝義さん) 防空壕は各家庭にあったが、奉公先の家族が入れるように家の脇の崖につるはしで横穴を掘った。防空壕掘りは韓^{朝鮮}国人がよく来ていた。作業の掛け声で日本人じゃないことが分かった。昭和十五年頃、小川内の

道路、大多武の堤は韓^{朝鮮}国人で作っており、食事は立ちながら取っていた。

九. 消防団の活動と宣伝ビラについて

(勝義さん) 当時二本松に交番があり、火の見櫓、その上に半鐘があった。一七歳くらいの時、奉公先の父の代わりに消防^警団として二歳上の先輩と二人で夜番をした(消防^警団に入るのは通常は二つくらい上の年齢からだった)。

電話で警戒警報、空襲警報と言われたら、半鐘を鳴らした。鳴らし方には区別があった。

宣伝ビラは終戦近くになるとよく撒かれているのを見た。消防団の詰め所かどこで見たのかは定かではないが、「うまくいくのか軍作戦」と書かれたビラを見たことがある。日本は包囲されているのかと思った。

終戦近くに諫早の小野にあった飛行場から、この辺りの出身の逃亡兵がいるので実家に連れて行って欲しいと憲兵隊が来たことがあり、連れて行ったがいなかった。

一〇．原子爆弾投下について

(勝義さん) 原爆投下時は、小川内の似田で田の草を取っていた。北東の方からB29が一機飛んで行き、警報が鳴らないと思っていたらピカッと光り、ものすごい爆音がした。爆風はなかった。その後、仕事を続けた。奉公先の奥さんが広島に落ちたのと同じ爆弾だろうと言っていた。

(輝子さん) 水田の家の中にいたが、音がして外を見ると長崎方面の空が真っ赤だった。

一一．終戦と終戦後の様子について

(勝義さん) 終戦は奉公先にあったラジオで聞き、はっきりと天皇陛下の声が聞こえ敗戦を知った。負けたことに関して何も感じなかった。

(輝子さん) 自宅のラジオで放送を聞き、内容が分かった。戦局が悪いのは知っていたので、特に感情はわかなかった。父は終戦後、残務処理に追われ、最終的に財務局に通ったが失業した。

(勝義さん) 終戦後、諫早から大村へ米軍の上陸用舟艇が何台も走っていた。道が狭かったのでそこを牛を連れて通る時、牛がはねられない



写真16 B29を見上げた小川内の田んぼ

か心配だった。

町内から奉仕活動の呼出しがあり、航空廠の米軍の所へ作業に行った。米軍の指示でトラックに航空廠内の机を積んだり、ブルドーザーが穴に落ちて動かなくなった時は穴の中に入って掘り起こした。塗装する前のトラックに紙ヤスリをかけたたりした。一日中、紙ヤスリをかけることもあった。奉仕の時は朝礼があり、点呼は一々頭で人数を確認していたが、頭を動かしたりして数を分からなくさせ、米軍をからかう人もいた。作業が嫌で途中でやめて帰る人もいたが捕まっていた。奉仕に行っても何ももらえなかった。海兵隊は荒かった。

(輝子さん)戦後、佐世保までパンパンになりに行った人がいると近所で聞いた。

■記録16

宮本 イネ 生年月日 大正八年七月十日 九四歳(終戦時二六歳)

性別 女性

宮本 祐治 生年月日 昭和十四年七月二十日 七四歳(終戦時六歳)

性別 男性 関係 親子

一、宮本イネさんの経歴について

三浦の網元から木場に嫁ぎ、結婚してから二町の畑を持ち、農業をしていた。当時木場は一〇〇戸ほどしかなかった。ご主人は一度召集され、久留米に出征した。出征する時には町内会や婦人会、幟を立てて、(木場の人達)総出で大村駅に見送りに行った。氏神様に参拝し、息子の祐治さんも日の丸の旗を振って見送った。ご主人は久留米に出征してから、足に底豆ができ、手術をした。当時連隊長であった方と近所で知り合いだったため、手術後「帰るように」と声をかけてもらい、帰ることができた。イネさんは一度おはぎやお寿司を作って久留米まで面会に行ったが、(ご主人が)なかなか出てこず、どうしたのかと思ったが足を悪くしていたからだった。ご主人は大村に帰っ

てきて、海軍病院のボイラーの機関士として働いた。

二. 消防団について

「警戒警報発令」と呼びかけながら、メガホンのようなものを持って消防団の人が走って回っていた。体の不自由な人や四〇歳ぐらいの年齢の人が消防団員だった。夜は灯火管制で暗くなってからは電球にかさをかけないといけなかった。消防団が見回りをしていて光が見えている場合は「電気が見えるぞ」と声をかけていた。消防団の詰め所は今の公民館の隣にあり、半鐘塔もあった。町内会長は鉄カブトを首に下げている。他の人は普通の（軍隊でかぶるような）帽子だった。

三. 当時の市民生活について

（イネさん）米は俵にして外に積んでいた。全て供出していたので食べる機会はなかったが、子どもがそれを食べたいとねだった。配給される稗、粟、大豆、豆などは、大村町まで取りに行っていた。

魚は鰯が配給されていたが、（イネさんの）実家が網元だったのでお兄さんが東浦まで船で来て、そこから裸足で歩いて持ってきてくれており、不自由していなかった。

（祐治さん）当時はそのままを塩茹でにしたものが昼飯だった。

覆牛、馬、豚を飼っていた。砂糖と塩は、町内から切符をもらい町まで買出しに行っていた。味噌・醤油は家で作っていた。野菜はダイコン、ニンジン、キャベツ、ゴボウ、サトイモ、芋（サツマイモ）を作っていた。

（祐治さん）友達と一緒にアケビやピワ、さんごの実、柿などを取って食べていた。いつもお腹を空かせていた。蔓のついたままの小さな芋（収穫しないで捨てたもの）を近所で芋飴を作っていた人を持って行き、交換してもらったこともある。戦時中、「米やイモを分けてください」という人が来ていた。捨ててある蔓のついた小さい芋は拾ってよいと父が言っていた。来るのは、大村の町の人もいたようだが、長崎や高島から来ていた人が多かった。当時は藁草履を履いている人がほとんどだったが、長くはもたないことが多かった。

四、防空壕について

自宅の敷地内にご主人と近所の人たち三人で防空壕を掘った。四、五〇人は入れる大きさで、他の家にはなかった。近所の人は皆入っていた。入る時は藁の袋を下に敷いて使った。

(祐治さん)父から防空壕が(入り口の途中の辺りから)斜めに掘ってあるのは、爆風を避けるためだと聞いた。防空壕に入るのは怖かった。海軍病院の第十一、十四病舎は結核患者用の病舎だったが、その崖の下にも一五人くらい入れる小さな防空壕がいくつもあった。

五、機銃掃射について

この辺りは焼夷弾で家が焼かれることはなかったが、機銃掃射を受けることが何回もあった。畑仕事のおばあさんが白い手ぬぐいをかぶっていたので畑の中で目立ち、米軍の航空機に狙われた。

六、婦人会について

(イネさん)当時、婦人会は消防団警と共に中心になって町内自治がされていた。公民館で週に一、二回集まりがあった。防空頭巾の作り方を習い、ご主人用に作ったり千人針をしたりした。

七、金属供出について

金属を供出したことはなかったが、近所の裕福な家は金品を供出していた。当時、鍋を買うのにも許可が必要で、ご主人が町で大きな鍋を買って帰っていると警察に呼び止められ、「鍋をどうしたのか、売ろうとしているのではないか」と言われ、買った店まで戻って「ここで買った」と説明をしなければいけないことがあった。(ご主人は)腹を立てていた。

八、海軍とのつながりについて

(祐治さん)父が海軍病院のボイラー機関士だったので海軍病院に友達と遊びに行ったところ、父と仲がよい調理師の人からパイナップルやりんごを内緒で食べさせてもらったことがあった。内緒の約束でもらったので、両

親にも言わなかった。

戦争中、海軍が食糧を確保し貯蔵するため、大きな小屋がある家を探し、「ご自宅の小屋を貸してください」と頼まれたので貸していた。中には干し肉や乾パン、ブドウ糖、ビスケットが高く積まれていて、「食べてよい」と言われていた。貯蔵しに来る度に「これだけ置いて行くから食べてください」と言われ、もらえた。ブドウ糖は菓をストロー代わりにして吸っていた。戦争が終わって二カ月くらいして取りにみえた。

九. 陸軍の戦闘機について

(祐治さん) 自宅の北にある尾根筋上の茂みに、陸軍の戦闘機が上からホロをかけて三機、翼を折り曲げて隠れていた。そばには小屋があり、そこには三人の三〇代のベテランと思われる搭乗員がいた。戦闘機が到着すると音で分かり、「二、三日すると飛ぶので見に行こう」と言い、友達と見に行っていた。見いても怒られることはなく、前にいたらプロペラに巻き込まれないように、後ろにいたら飛ばされないように言われた。隠れていた尾根筋(当時の木場のメインストリート)から飛び立ち、諫早方面から第二十一海軍航空廠へ飛んで来た米軍機と空中戦をするのを見ていた。米軍機は、与崎にあった高射砲台を避けるため、一旦海面すれすれを飛んで、あとから高度を上げていた。空中戦の後、戦闘機はまた同じところに戻って来ていた。見ている限り落ちたことはない。

一〇. 原子爆弾投下と海軍病院でのお手伝いについて

(祐治さん) 原子爆弾投下時は、爆風は来なかったが地響きがした。下が赤く外側は黒い雲が上がっていた。

(イネさん) 翌日になって婦人会の若い人たちと一緒に病



写真17 陸軍の戦闘機が飛び立った道路

院へ三歳の息子・武昭さんをおぶって手伝いに行った。ご主人は、岩松駅から病院まで被災者を馬車で搬送した。婦人会の女性は二人一組になって遺体を毛布にくるんで抱えて、リヤカーに乗せて男性が掘った穴まで運んで、土をかけて埋めていた。埋めた所がぼこぼことしていた。よく見たら蛆が湧いていた。数日間はその作業のため病院に通った。息子の武昭さんは作業の間は木に結んでおいた。

一・終戦と戦後の様子について

(祐治さん) 八月十五日のラジオ放送は近所のラジオで聞き、農作業をしていたイネさんに「戦争に負けた」と伝えた。

(イネさん) それまで負けるとは思っておらず、皆一生懸命だったので残念だった。米軍が来るということで青年団は竹槍の訓練をしていた。

〔復戦後〕朝鮮の人たちがこの辺り一帯にたくさん来て、焼酎造りをしていた。岩松駅に住んでいた。鈴田にも朝鮮人集落がたくさんあった。芋がたくさんあったので、山でこっそり焼酎を造り、それを売って暮らしていた。沖繩から来ていた人たちもいたが、その人たちは畜産業で生計を立てていた。祐治さんが中学校にあがる昭和二十五年にはほとんどの朝鮮の人たちはいなくなっていた。

(イネさん) 警察官の兄は仕事帰りに休憩がてら家によく立ち寄ったが、朝鮮人の焼酎造りを調べに来ているのだと噂が立ってからは、気をつかって立ち寄りなくなった。

(祐治さん) 学校の運動会に米兵が女性に連れられて見に来ていた。手を出すとチョコレートをくれたので、二、三回もらったことがある。戦後四、五年は長崎や離島から米や芋を分けてくださいという人が来ていた。

註

(1) 竹下昭子『戦争と放送』社会思想社 一九九四によれば、三天皇陛下におかせられましては、全国民に対し、畏くも御自ら大詔

- を宣らせ給うことになりました。」とあり、僅かに錯誤が見受けられる。
- (2) 地元では葉の裏が白かったので、ウラジロと言った。シダ植物のウラジロとは別。
- (3) 第二次世界大戦後の日本で、主に進駐軍の兵士を相手とした街娼・売春婦を指した語。
- (4) 中村メイ子（一九三四〜）の旧芸名。女優、歌手、タレント。
- (5) 主に海軍内で上官等から行われた体罰。しごぎ。
- (6) 記載している記録1、3の体験者・田中誠さん。
- (7) 現在では、長崎県戦没者慰霊奉賛会が主催して長崎県戦没者追悼式が行われている。
- (8) 流動する国際状況から飛行機製作は急を要し、佐世保工廠の中の飛行機課は拡大することになった結果、昭和十二年日宇に海軍航空廠が独立し、発足。
- (9) 戦争で生じた損害の賠償として、金品や資産を提供すること。
- (10) 大砲の砲身を水平な状態で射撃すること。目標が極めて近距離にある場合に行う。